



創立40周年記念講演会を開催。写真左から、黒澤隆夫副学長、東郷重興理事長、北海道大学名誉教授・鈴木章先生、新川詔夫学長 [関連記事14ページ]

創立40周年を迎えて

理事長 東郷 重興

1974(昭和49)年に本学園が創立されてから40年を迎え、薬学、歯学、看護福祉学、心理科学、リハビリテーション科学の5学部を擁する医療系総合大学に成長しました。その目指すところは学生諸君がそれぞれの専門分野を超えて交流し、お互いに切磋琢磨する環境を整え、近年ニーズの多様化する医療現場を支えるプロフェSSIONALな医療人を育成することにあります。すべての学部学生に自分の専門外の分野についても「多職種連携カリキュラム」という講義の中で目を開かせるだけでなく、今後は病院での実地研修の中で教える、具体的には市中の大病院の中で色々な専門分野の医療人がチームワーク良く、仕事をしているかを見聞かせることが必要ではないかと考えています。

北海道医療大学は創立40年が経ち、ここまで成長することができました。しかし医療技術の進歩は益々早くなり、複雑化しています。医療系総合大学として、これからその特色をどう生かして行くのか問われていると思います。医療系総合大学としての幹に、これからどうやって枝をたくわえ、大木になっていくか、更なる教育力の充実を図らなければならないと考えています。

今後更なる飛躍を遂げるよう、改革、改善への努力を一層重ねていく所存でございます。関係各位の今後一層のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

学長 新川 詔夫

知育、徳育、体育の「三育」を建学理念として1974年に創立された本学は今年で開学40年目を迎えました。音別町時代の旧教養部や薬学部・歯学部の創立初期の労苦を経て、1985年から当別町がメインキャンパスの地となり現在に至っています。その後ほぼ10年毎に新分野の設立・拡充をはかり、創立20年を期して東日本学園大学から北海道医療大学へと大学名称を変更し、現在5学部8学科・研究科および専門学校に通う3,300名以上の学生と600名を超える教職員からなる医療系の総合大学となりました。また、17,000名以上の本学卒業生が社会の中枢として全国各地で活躍しております。

40年の節目の年に当たり、将来の日本の医療を支えていく本学学生たちのフロンティア精神を後押しするために、記念事業としてノーベル化学賞受賞者の鈴木章先生をお迎えして、過日学術講演会を盛大に開催しました。学生とともに聴衆一同も深く感銘を受けました。

本誌は40年間の本学の歩みを記録したものでございます。本学の現状とその目指すところをご理解いただければ幸いです。本学に対するみなさまの今後一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

CONTENTS

創立40周年を迎えて	1
創立40周年記念 誌上座談会	2
北海道医療大学 40年の歩み	10
創立40周年記念 講演会を開催	14
OG訪問 [創立30周年エッセイコンテスト優勝者]	16
○新任職員・昇任職員紹介	18
○北海道浦河高等学校と高大連携協定を締結	
○中山大学と本学歯学部が学術交流協定を締結	
○台北医学大学短期留学プログラムの報告会	19
○サハリン州副首相・保健省大臣が来学	
○アルバータ大学薬学部長が来学	
2015年度 入試概要	20
私の学生時代	22
○全国に先がけて大学病院で導入した 歯科技術が全国紙に	23
○眞島いづみさんとKabirさんが 台北医学大学で表彰	
○九十九祭開催	24
○YOSAKOIソーラン祭り部 ファイナル進出「優秀賞」受賞	
○クラブ戦績	25
○バドミントン部一部リーグ昇格	
○中国同済大学と交流協定を更新	26
○インド大使館科学技術部による本学視察	
○編集後記	



今原 伸治 さん [薬学部2期生]
武田薬品工業(株) 医薬営業本部
マーケットマネジメント部長



藤川 隆彦 さん [薬学部14期生]
鈴鹿医療科学大学大学院薬学研究科 教授



三浦 宏子 さん [歯学部2期生]
国立保健医療科学院 国際協力研究部長



中村 公則 さん [歯学部13期生]
北海道大学大学院先端生命科学研究所 准教授

創立40周年記念特別企画 誌上座談会

「北海道医療大学と私」

全国各地の医療・福祉現場、研究・教育の最前線で活躍中の本学卒業生に、
現在の仕事をはじめ、大学時代の思い出、母校への期待などをお聞きしました。
それぞれが精力的に活動されているなか札幌にお集まりいただけた4人と、個別インタビューに応じてくださった4人、
合わせて8人の卒業生のお話を誌上座談会としてまとめました。



河村 奈美子 さん [看護学科1期生]
大分大学医学部看護学科 准教授



大原 裕介 さん [医療福祉学科※7期生]
社会福祉法人ゆうゆう 理事長
※現臨床福祉学科



本谷 亮 さん [臨床心理学科1期生]
福島県立医科大学医療人育成・支援センター
／医学部神経精神医学講座 助教



千葉 真澄 さん [臨床心理学科3期生]
テレビ北海道 アナウンサー

卒業生たちのいま

黒澤：様々な分野で活躍中の卒業生のお話をこうしてお伺いできることを大変うれしく思います。みなさんの現在のお姿から本学と実社会のつながりが見えてくることを期待しております。お仕事のご様子、母校の思い出を語って頂き、本学への提案、励ましも頂きたいと思えます。よろしくお願ひします。まず、自己紹介を兼ねて、現在のお仕事についてお話しください。

今原：薬学部2期生です。卒業して武田薬品工業に就職し35年になりました。現在は、医薬営業本部におり、営業戦略、情報戦略、関連システムの運営・管理、製品の広報、並びにコンプライアンスに関する指導を統括しています。製薬メーカーの仕事は開発した医薬品を通して患者さんご家族に笑顔を届けることです。社会に不可欠、非常に重要な役割を担う中で全社的な影響力をもつ職に就き、責任が重いだけにやりがいの大きな仕事をさせて頂いています。

入社以来、MR（医療情報担当者）、リーダー、所長として得てきた様々な経験を生かして、後進の指導にあたることにも手応えを感じます。定年も見えてきましたが（笑）、現役の間はアグレッシブに、世界のより多くの人々がそれぞれの人生を豊かに過ごせるよう予防から治療・治療にわたる医療の多様なニーズに貢献したいと考えています。

黒澤：今原さんには本学の生涯学習事業・医療薬学セミナーの講師を何度も務めていただいています。この9月にも、広島市で医薬品業界についての最新の話をお話し頂きました。では、次は同じ薬学部出身の藤川さん、お願いします。

藤川：薬学部14期生です。鈴鹿医療科学大学薬学部で分子予防薬理学研究室を主宰しています。本学部では担任制をとっており、各学年3～5名の学生を受け持ち入学時から国家試験対策まで、一人ひとりの状況を把握し個人面談など細かな指導を行っています。これまで担当した学生の中には、成績不振者が面談を境に急激に学力を上げストレートで薬剤師国家試験に合格したケースもありました。このことは、教員と学生の人間関係の大切さを実感した出来

事で、16年間医学部に在籍し研究至上主義の環境にいた私が教員としての大きなやりがいを見つけるきっかけとなりました。以来、私の研究室にきた学生全員を国家試験合格に導き、いきいきと社会で活躍する姿を見るのが私の夢や目標より優先されることになりました。

研究活動では、(1) 杜仲茶エキスおよびその主要成分・アスペルロシドによる抗肥満効果の作用機序解明、(2) 杜仲茶エキスによる食欲抑制効果の作用機序解明、(3) 食品による安静・睡眠誘導効果の作用機序解明、(4) エゾウコギエキスによる自律神経調節機構の解明、(5) 既存の食品への特殊な加工による新規原料化の開発、以上大きく5つを進めています。

黒澤：本学は薬学部開設の4年後に歯学部を開設しました。今年は歯学部1期生の卒業から30周年です。歯学部2期生の三浦さん、13期生の中村さんは、現在どのようなお仕事をされていますか。

三浦：国立保健医療科学院に勤務しています。保健・医療・福祉に関係する自治体職員等への研修、並びに関連する調査研究を行う厚生労働省直轄の機関です。国が実施する厚生労働施策に関連する調査研究を行い、具体的な提言を行うこともしばしばです。歯科口腔保健法第12条に定められた基本的事項の策定と、国民健康づくり対策として実施されている健康日本21（第二次）の策定、これらでは厚生労働省内の専門委員会の委員を務め、基本的事項の策定に関する専門委員会では委員長代理を務めました。調査研究で得られた成果が国の施策に活用されることには大きなやりがいを感じます。また、歯科口腔保健法が制定されたこともあり、地域における歯科口腔保健施策に大きく関与できたこともうれしく思います。

今年から国際保健の仕事も加わりましたので、日本の高齢化対策や生活習慣病対策を、アジア諸国の健康施策に役立てる活動にも力点を置きたいと考えています。

中村：北海道大学の北キャンパスエリアにある先端生命科学研究院の自然免疫研究室で腸



【進行】黒澤 隆夫 副学長、薬学部教授

管免疫をテーマに研究を進めています。腸内抗菌ペプチド、とくにパネト細胞 α -ディフェンシンの働きに着目し、疾患との関連を探っています。 α -ディフェンシンが常在菌と病原菌の選択という働きを担うことを研究室として論文発表したのに続き、 α -ディフェンシンの測定方法を開発し、現在はマウスを使った実験が進行中です。 α -ディフェンシンの不足、過剰と、肥満や糖尿病といったメタボリックシンドローム系の疾患との関連性を明らかにすること、潰瘍性大腸炎、クローン病の炎症性腸疾患の原因解明と治療法開発をめざしています。 α -ディフェンシンがコントロールできるようになれば、サプリメントの開発、検査のマーカーとして使う可能性が考えられ、予防医学へも貢献できるという希望をもって進めています。

歯科医師らしい研究としては、培養した小腸の上皮細胞を使い、口腔常在菌と腸管自然免疫のクロストークの解明に取り組んでいます。口と腸はつながっていますから、イベントで子どもや市民に説明するときは、「簡単にいうと体はちくわみたいなものなんだよ」と説明します。（笑）

自分の立てた仮説通りの結果が出ることはごく稀ですが、そのめったにないポジティブな結果を目にしたときの「いま、このデータを知っているのは世界で自分だけだ」という感覚が忘れられなくて、先へ先へと進んでいます。

黒澤：本学は1993年には全国の大学で初めて看護教育と福祉教育を融合した看護福祉学部を開設しました。今日は看護学科1期生と臨床福祉学科の7期生にお越しいて頂いています。

河村：看護福祉学部看護学科1期生、東日本学園大学の校名で最後の入学生です。現在は、大分大学の看護学科で精神看護学を担当して

います。助教と二人、概論から方法論まで講義、演習・実習、研究指導すべてを担当しています。教員になって、北海道医療大学の教員数の多さがよくわかりました。また、発達障がい児の施設での遊びの支援など、学生を巻き込んだボランティアの場をつくることにも取り組んでいます。

研究テーマはアニマルセラピーです。コミュニケーション上の障がいがある認知症高齢者や子どもを対象に、動物、(犬、馬)がいることで人と人のコミュニケーションがどう発展するかを研究しています。昨年から発達障がい児のケアに乗馬療法を取り入れました。所有する馬をセラピーだけでなく、福祉サービスに活用することも考えています。精神看護を専門としているせいか、看護と福祉の境界を意識せずに活動しています。今日いらしている大原さんの講演もお聞きしたことがあります。

大原：看護福祉学部臨床福祉学科7期生です。実はさのうはフォーラムがあって大分にいました。活動に重なる部分があるので、ぜひ次は河村さんの所にも寄らせて頂きます。

私は2012年より当別町の社会福祉法人「ゆうゆう」理事長を務めています。「ゆうゆう」の前身は北海道医療大学の卒業生4人で2005年に設立したNPO法人、さらにその前身は学生ボランティアの活動拠点でした。「ゆうゆう」の基本的事業は障がい者の社会参加の支援で、障がい者が働く場としてレストランやカフェ、農園などを経営しています。その他、デイサービスセンター、在宅介護支援センターなど、現在では当別町と江別市に10事業所を展開しています。北海道医療大学出身者を中心にした福祉専門職のほかパティシエやグラフィックデザイナーなど多彩な職員がおよそ60名、登録ボランティアは1,500人強の組織です。当別町では数少ない、北海道医療大学生の就職先としての位置づけも意識しました。

黒澤：卒業生が後輩の活躍の場をつくるというのは本学も望む、理想的なカタチです。大原さんは本学の客員教授でもあり、また学生の実習も受け入れて頂いていますね。

大原：はい、全学的授業を担当しています。臨

床福祉学科1年生には当ボランティアセンターでの2日間のボランティアを必修としています。ここで福祉の現場の面白さに目覚める学生もいます。学生の介護職員初任者研修(旧ホームヘルパー2級)を支援して、修了者にはグループ施設で介護のアルバイトをもらうシステムもあります。

「ゆうゆう」の活動理念は「地域を創る」です。既存の施設やサービスがなければ自分たちでつくります。障がい者も高齢者も自分の役割を見つけれられるまち、人生の最期まで暮らせるまち、学生も大人も、行政も民間企業も、まちの誰にもメリットのあるまち、ネガティブなイメージで語られることが多い“地方”で、新しいまちのデザインを提示していきたいと思っています。福祉は非常にクリエイティブな世界です。地域には課題が山積で、その多くが福祉に関わることです。やりがいだけの仕事といえます。ただ、私自身は仕事をしているという意識は希薄で、生き方をかたちにしている、表現しているという感覚です。

黒澤：本学では2002年に心理学部を開設しました。文系で教育されることが多かった心理に科学的にアプローチする新しいかたちの臨床心理学科からは1期生、3期生にお話を伺います。

本谷：心理学部臨床心理学科1期生です。福島県立医科大学で、学生、教職員の相談活動、附属病院の心身医療科でカウンセリングや検査など臨床活動を行っています。臨床と並行して行っている研究の中心は、慢性疼痛の患者さんに対する認知行動療法です。恩師、坂野教授は認知行動療法のわが国における第一人者ですから母校の誇りにかけて、有効な心理療法プログラムの開発を実現させるとともに、効果を脳科学の視点からも明らかにしたいと考えています。教育面では、学生の医療面接や災害時のこころのケアに関する演習形式の授業を担当しています。東日本大震災後は地域支援が増えたので、学外で民生委員やボランティアに対



する自殺予防、被災者・避難者支援での相談会や健康講話などの活動も行っています。

病院臨床で働きたいという希望が叶い、加えて福島医大病院は疼痛治療への先進的取り組みで全国的に知られる病院ですから、学部時代から「痛みに対する心理的支援」を専門テーマとする私には恵まれた環境下にいます。

千葉：臨床心理学科の3期生です。臨床心理学科の卒業生の進路は心理士などの専門職以外にも多彩で、私の職場はマスコミ、テレビ北海道です。現在は平日夕方の「道新ニュース」キャスター、土曜日の「サマー競馬」MC、「けいざいナビ北海道」のナレーションやレポート、その他映画のインタビューや野球のベンチリポートなどを担当しています。放送には画面に映るアナウンサーだけでなく、取材スタッフやカメラマン、音声スタッフ、タイムキーパーなどたくさんの方が関わり、それぞれの仕事に全力を注いでいます。私はそれを限られた時間の中で視聴者にしっかり伝えることが役割です。

私が「伝える」「つなぐ」ことが自分の仕事だと本当の意味で理解したのは生放送の現場、札幌ドームでの野球の試合終了後のヒーローインタビューでした。観客すべての視線が一点に集中した中でのインタビューで、広さと雰囲気は圧倒されマイクを握る手が震えました。でも、そのときふと観客席に目をやり、「選手は何を言ってくれるんだろう」という期待の表情で埋め尽くされているのを見て、「主役は選手、私は選手とファンをつなぐ役目」という当たり前のことに気づくことができました。すると、ふっと楽になり、リラックスしてインタビューができました。アナウンサー歴7年目になりますが、私なりに他者をつなぐコミュニケーションを考え、工夫する毎日です。

大学での経験がいま生きている

黒澤：本学での学びと現在のみなさんのお仕事とは切り離して考えられないと思いますが、本学での経験はどう活かされていると感じますか。在学中の思い出を交えてお聞かせください。

今原：私が入学した時は、当別キャンパスとは別に教養部の校舎が道東の音別町（現・釧路市）にありました。入学から1年半はタンチョウやエゾシカが身近にいる大自然の中での寮生活、最初の半年は入学したばかりの私たちと怖い1期生（笑）、次の半年は同期だけ、最後の半年は3期生との集団生活でした。2年次後期に当別キャンパスに移っても当時は交通の便も悪く、遊ぶ場所もなく、閉鎖的な環境だったといえます。しかし、その環境こそ人間関係構築力を育



今原 伸治さん

武田薬品工業（株）
医薬営業本部マーケティングマネジメント部長

●薬学部薬学科2期生 1979年卒業

薬剤師。北海道江別市出身。1979年4月武田薬品工業（株）入社。MR（医療情報担当者）として新潟支店を皮切りに神戸営業所チームリーダー、医薬営業本部マーケティングマネジメント部課長を経て、1997年大阪支店堺営業所所長。その後、広島営業所所長、医薬営業本部マーケティングマネジメント部グループマネジャーを務め、2007年札幌支店支店長、2011年大阪支店支店長。2013年4月より現職。本学薬学部同窓会主催の生涯学習事業・医療薬学セミナーの講師としてもおなじみ。

てくれました。いうまでもなく社会に出て大いに役立つ力です。あの時間を共に過ごした同期は生涯の友となり、いまでも毎年札幌で開く同期会には全国からたくさんの同期が時間をやりくりして集まります。

学びの面では、2年次の後期から卒業まで物理化学教室で取り組んだ研究がいちばんの思い出です。当時の山本教授、現教授の豊田先生の指導を受けながら、同期の鈴木君と実験を重ね英語論文にまとめました。学部生ながら英文雑誌に論文が掲載され、大きな達成感を得られました。この論文は、社会に出てからは度々、営業先のドクターと別刷りの交換などを通して距離を縮めるきっかけにもなりました。

そして何より、遊びたい盛りには厳し過ぎると感じるほどのご指導を受け（笑）、その結果取得できた薬剤師免許です。国家資格は身を助けます。薬剤師免許が営業での情報提供の説得力を増してくれる場面が多々ありました。

藤川：在学中に身についたことというと、まず実験テクニック、そして自学自習の習慣です。薬学部では各分野まんべんなく実習、実験がありましたが、その積み重ねからどこでも通用する実験テクニックを得られたことが、大学の外に出てわかりました。博士課程から長く医学部に在籍しましたが、医学部の大学院でも実験テクニックで劣っていると感じたことはありません。新しい実験に対しても簡単に対応できましたし、むしろ容易に感じるものもあつたくらいでした。また、北海道医療大学の先生方は厳しい反面、自主性に任せてくれる部分があり、自学自習に取り組む環境を作ってくれました。2年次からは講義前に「朝勉」と称してマクマリーの有機化学（洋書）、ハーバーの生化学（洋書）を繰り返し読み、夕方からは図書館が閉館するまで薬理学を勉強しました。この時に得た知識が大学院で大いに役立ちました。

黒澤：朝勉とは、勉強熱心な学生でしたね。学習意欲に火をつける雰囲気は教員が作り出せたとしたら大学としてうれしいことです。



藤川 隆彦さん

鈴鹿医療科学大学大学院薬学研究科 教授

●薬学部薬学科14期生
大学院薬学研究科修士課程1993年修了

1996年12月三重大大学院医学系研究科博士課程短縮修了。医学博士、薬剤師。大阪府出身。三重大医学部生化学講座助手、同講師、シンシナチ大学医学部に文部科学省在外研究員、国際科学振興財団兼任研究員を経て、2005年三重大大学院医学系研究科ゲノム再生医学講座講師、2008年同准教授と16年間医学部に在籍。2009年4月鈴鹿医療科学大学薬学部教授（薬学分子予防薬理学研究室）就任、2014年4月より現職。社外技術顧問を務めるなど積極的に民間企業とも連携。知的財産関連で3年連続学長表彰（三重大）。三重大医学部客員教授。

藤川：もちろん、勉強だけしていたわけではありません（笑）。バスケットボール部で学年や学部を超えた先輩・後輩と楽しい思い出もたくさん作りましたし、修士課程では札幌にある病院の薬局でアルバイトをさせて頂きました。振り返ると、時間の使い方を学んだと思います。「できる時間にできることを全てした」といえる大学時代でした。博士課程を短期修了できたのもそのおかげです。

自分が学生を受け持つ立場になり、当時の先生の大きさをあらためて感じます。忘れられないのは2年次の微生物の実習期間中に札幌で開催されたノーベル賞フォーラムに友人と2人、どうしても参加したいと森教授にお願いしたときのことです。私たちが後日、特別実習を受けられるよう取り計らってくださり、フォーラム参加を認めてくださいました。このときの講演で「これが研究なんだ」と全身で感じたことで現在の私があります。とても感謝しています。



中村 公則 さん

北海道大学大学院先端生命科学研究院 准教授

●歯学部歯学科13期生
大学院歯学研究科博士課程2000年修了

歯科博士、歯科医師。北海道美幌町出身。本学大学院博士課程修了後、札幌医科大学医学部分子医学研究部門助手、同講師を経て、2009年北海道大学大学院先端生命科学研究院特任助教、2011年同助教。2013年より現職。所属は生命機能科学研究部門細胞生物科学分野自然免疫研究室。

黒澤：いいお話です。さて、歯学部卒業生の三浦さんはどのような思い出がありますか。

三浦：大学時代といってまず思い出すのは最終のJRに乗り遅れないよう走ったことです（笑）。当時、歯学部の実習は遅い時間まで実施されることが多く、いつも当別キャンパスの坂を小さな駅に向かって全力で走り下っていました。目の前の課題をこなすのに精一杯の毎日でしたが、地道に積み重ねる努力と一つのことをやり遂げる強さが育まれた6年間でした。

学部卒業後は口腔衛生学講座の助手に採用され12年間勤務しましたが、大学の滞在時間はやはり長くハードでした。歯学部2期生ということで社会に出て活躍する先輩のロールモデルや基準となるデータが少なく、手当たり次第にチャレンジしていた印象がありますが、そんな当別での18年間の全てがいまの私の礎です。

黒澤：同じく歯学部卒業の中村さんはいかがですか。

中村：現在、先端生命科学研究院で腸内免疫を研究するという一見歯科とは関係のない環境にいますが、私は歯科医師免許がすべてのベースにあると思っています。歯学部で学んだ疾患の知識が役に立ったこともありますし、今原さんがおっしゃるように国家資格が説得力をアップしてくれる場面もあります。そして何より、国家試験という関門が私に学ぶ喜びを教えてくださいました。気づくのが遅すぎて後輩の手本になれませんが（笑）。国家試験に向けて周りの学生は膨大な量の情報をどんどん暗記していましたが、いざ始めてみると私は暗記が苦手で、できなかった。たぶんつまらなかったんです。それでどうやらできるかを考え、自分に合っているのは暗記ではなく理屈だと気づきました。すると全てが互いに結びついてストーリーとして見えてきました。知らないことがどれほど多いか、知らないことを知ることがどれほど面白いかが、その発見が大学院進学、研究の道へ進むきっかけとなりました。

黒澤：次に、看護福祉学部卒業の河村さんと大原さんに伺います。看護と福祉を融合した学部であると感じたことがあればそれもお聞かせください。

河村：私が看護と福祉の境界を意識することがないのは、やはり大学時代の環境にあると思います。臨床福祉学科と一緒に受ける授業もありましたし、休み時間のたびに看護福祉学部棟1階のラウンジに学生が集まって学科の違いを意識することなく楽しく過ごしていました。精神看護学実習で統合失調症の若い患者さんを担当し精神看護への興味が猛烈に湧くと、ますます福祉領域との親和性を感じるようになり、同時に、ケアの精神は共通でも私たち看護とは知っていることが違うことを発見しました。

こうして年数がたって、北海道医療大学の自由な雰囲気を、あらためてありがたく思います。先生方は学生のクリエイティブな発想、アイデアを尊重してくださいました。待っていてくれるからかで学生をのびのびと育ててくださいました。アニマルセラピーですとか興味あることに取り組めるのはそのおかげだと思います。また、在学中に使った教科書や先生方の著書が、いまは自分の授業の組み立てに役立っています。

大原：私も在学中から看護の先生方がこちらが思う以上に深く福祉の学生を理解してくれていると感じていました。大学院でも看護学専攻の方々と一緒に受ける共通科目があり、グループワーク、ディバートの機会がありました。看護師としての現場経験を経て大学院に入学された社会の先輩である方々と共に学び、議論できたことは大変刺激的、貴重な経験でした。

黒澤：本学では全学部の学生が関わるボランティア活動も伝統といえると思いますが、大原さんは当別町の学生ボランティアの拠点「ゆうゆう24」の立ち上げ時にも関わっていますね。

大原：はい。学部4年次に進級してからの1か月は開所準備で床張りなど大工仕事に費やしました。それがすべての始まりでした。当時教授だった横井寿之先生との真の意味での出会いはこのときです。私は1浪して北海道医療大学に入学しましたが、もし現役で大学進学していたら「ゆうゆう24」の立ち上げの場にはいなかった



河村 奈美子 さん

大分大学医学部看護学科 准教授

●看護福祉学部看護学科1期生 1997年卒業

2000年札幌医科大学大学院保健医療学研究科修士課程修了。2010年奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了。博士(学術)、看護師。北海道札幌市出身。1997年より札幌医科大学医学部附属病院に看護師として、大学院の2年間を挟み2002年3月まで勤務。その後、旭川医科大学医学部看護学科助手、札幌市立大学看護学部助手、同助教を経て、2012年4月より現職。

たと思うと、運命のようなものを感じます。教員であり、それ以上に現場人である横井先生の行動、発言を直に感じて「生き方=福祉」であると学び、「ゆうゆう24」の活動の中で福祉に対するマイナーなイメージが完全に払拭されました。人生観が変わりました。

大学院ではボランティアと、朝まで酒と議論の日々、24時間テレビに合わせたチャリティーイベントを役場や商工会をはじめ当別町の方々と連携して始めたのもこのころです。そして修士2年目の後半は論文執筆と「ゆうゆう24」のNPO法人化の申請準備を並行させました。学生がいきなり起業しようというものですからかなり大変でしたが、共に苦労した仲間はもちろん、先生、当別町の大人たちに陰ひなたにサポート頂きました。この経験で当別町へのこだわり、愛着が格段に増しました。どれもこれも、北海道医療大学だからできたことです。

黒澤：福祉領域をもつことは本学の強みの一つです。福祉の学生は他の医療系国家資格のような具体的目標が見えづらい点もありますが、大原さんは明確な一つの将来像を示してくれています。さて、心理科学部卒業の本谷さんは“心理科学部”らしさを感じたことはありますか。

本谷：心理科学部の名の通り、物事を科学的にとらえる視点、思考が養われました。情報をうのみにせず、偏見や憶測に踊らされず、目の前で起こっていることに対して丁寧にその現象の仕組みをひもといて、解決の糸口を探るという姿勢は、学部時代に徹底されました。「なぜ？」を大切に、その疑問に対して仮説を立て、情報を集め、正しいかどうかを科学的に検証する作業は、いまの臨床、研究どちらにも欠かせないものとなっています。学生時代に友人たちと悩み、議論した経験も生きていますね。また、学部、大学院と7年指導頂いた坂野雄二教授の「できるかできないかではなく、やるかやらないかだ」という言葉は、いまも私の活動の指針です。

黒澤：本谷さんは心理科学部1期生ですが、1期生は「あいの里キャンパスの校風や伝統は自分たちがつくる」という心意気があり団結が強かった印象があります。

本谷：そうですね。あいの里キャンパス内でサークルもできましたし、看護福祉学部と同様、心理科学部も学科の区別なく交流していました。とくに1期生は独特の使命感のようなものがあり仲間意識も強かったと思います。学部、大学院で苦楽を共にした仲間は、いま全国の各領域で活躍していますが、めざす方向性が同じ人もいます。彼らとコラボレートすれば社会に還元できるさらに大きなプロダクトを生み出せる可能性があると考え、いま、その方法を探っています。

黒澤：ぜひ実現させてください。期待しています。さて、マスコミで活躍中の千葉さんにとって大学はどのようなものでしたか。

千葉：大学の4年間は、大事な選択を迫られる人生の分かれ道のような時間だと思います。私自身、子どものころからアナウンサーを夢見ていましたが、3年次の病院での臨地実習で心理職の素晴らしさに触れ、かなり心が揺れました。迷いを吹っ切れたのは、現教授の冨家直明先生が当時スクールカウンセラーを務める高校での実習でした。生徒の前で話をする機会を頂き、「夢を諦めないで」という話をしたのですが、その時に「私はアナウンサーになる夢を実現させるから」と言ってしまったんです。人前で言葉にすると夢が現実味をもちました。声にして、言葉で発信することの力を実感しました。

楽しい時も迷った時も、大学時代いつもそばにいてくれた仲間は特別な存在です。とくに言語聴覚士や道外でスクールカウンセラーとして活躍中の卒業旅行のメンバーとは、いまも年に一度の海外旅行が恒例になっています。

学びがいまに通じていることといえば、やはりインタビューの場面でしょうか。様々な分野の方から初対面の限られた時間でお話を引き出すためには事前準備が不可欠で、まずそこで大学で学んだ情報収集の方法と客観的に物事を判断する力が生かされていると思います。実際のインタビューの際には、傾聴、受容や共感といったことが自然に頭にあり、知識そのものというよりコミュニケーションの作法みたいなものが身についたと感じます。「千葉さんだと話しやすいのよね」といわれるとカウンセリングを学んだおかげかなと思います。



本谷 亮さん

福島県立医科大学医療人育成・支援センター
／医学部神経精神医学講座 助教

●心理科学部臨床心理学科1期生
大学院心理科学研究科博士課程2011年修了

臨床心理士、博士(臨床心理学)。札幌市第1種非常勤職員(臨床心理技術者)、町立長沼病院精神神経科非常勤心理士、学校法人美芸学園こどもcom.専門学校非常勤講師、日本学術振興会特別研究員DC2を経て、2010年福島県立医科大学医療人育成・支援センター／医学部神経精神医学講座助手。2011年本学大学院博士課程を修了し、現職。2012年よりいわき明星大学人文学部心理学科非常勤講師も務める。

黒澤：本学の医療・福祉の担い手教育、また本学のこれからの期待すること、ご意見があれば、お話しください。

今原：私の在学中は薬学部に歯学部が加わったばかり、それが現在では医療系の総合大学となったことを誇りに、また頼もしく思います。その総合力を発揮し、社会が抱える様々な問題の解決を図ることを望みます。特に地元北海道の医療を支える中心的存在として強化されることに、大きく期待します。また、卒業生は多方面で活躍していますから、交流をさらに活発化すれば、社会で大きな力を発揮できるでしょう。日本一価値ある医療系総合大学へ発展していく過程を卒業生の一人として今後も楽しみにしています。

藤川：専門知識や技術の詰め込み教育ではなく、人の苦しみや痛みを自分のこととしてとら

え、優しさや愛情をもった医療や福祉を実現するという職業の根源にあるものを忘れず行動できる実践者を育てる教育に期待します。例えば、重要度を増す地域医療・福祉において、今後はセルフメディケーション、在宅に特化した薬剤師も必要となるでしょう。病院内だけでなく、地域で広く多職種連携ができる人材を育てる教育は単科大学には難しく、医療系総合大学の果たすべき使命と考えます。

また、私は北海道医療大学の夢つなぎ入試に感動しました。家庭の経済環境に関わらず意欲をもった学生に門戸を開く大学であり続けてほしいと思います。私も将来は経済的に困難な若者に学ぶチャンスを提供するシステムをつくりたいという夢をもっています。

三浦：国は今後10年間で医療と介護の提供体制の大幅な見直しを予定しています。超高齢社会を見据えた対策はすでに始まっていますが、そこで特に重要なのは多職種連携と地域性をふまえた課題分析能力です。北海道医療



三浦 宏子 さん

国立保健医療科学院 国際協力研究部長

●歯学部歯学科2期生 1985年卒業

歯科医師。神奈川県出身。1985年4月本学歯学部口腔衛生学講座助手、1995年同講師。1997年12月東京大学大学院医学系研究科国際保健計画学教室講師、2000年4月九州保健福祉大学保健科学部教授(言語聴覚療法学科)、2003年より同大学健康管理センター長を併任。2008年国立保健医療科学院口腔保健部長。2014年4月より現職。北海道医療大学客員教授。

大学の強みが生かせる時代です。今後さらに学部横断的な取り組みを推進し、社会が待っている医療や福祉の実践者の輩出を切望します。

また、わが国の医療・保健・福祉が抱える課題は高齢化と疾病構造変化を受けて、今後さらなる困難化が予想されます。地域の課題に根ざした対策を推進する上で、最終的に基盤となるのは人の力に尽きます。ニーズの変化に柔軟に対応する教育で、力のある医療人育成がさらに推進されることを願っています。

大原：藤川さん、三浦さんのおっしゃるように、高齢者や障がい者の在宅介護は国が推し進める施策です。人、設備、そして何よりフィールドという財産をもち、地域に密着した北海道医療大学が貢献できるポテンシャルはとても高いと思います。長く暮らしたまちで人生の幕を閉じるまで、どういう豊かさをつくれるか、総合力を生かしてのブランディングが可能だと思います。具体的には、大学附属の在宅医療センターのようなものができるといいと考えています。それは学びの場、就職の場、研究の場にもなり、さらに先へつながっていきます。

本谷：医療・福祉の現場で必要とされる多職種連携ができ、かつ自主的に考え実行する人材の育成に期待しています。現場では、明確な答えのない場面に遭遇します。その中でもつづれずに、柔軟な対応ができるよう、自ら考える学



大原 裕介 さん

社会福祉法人ゆうゆう 理事長

●看護福祉学部医療福祉学科7期生
大学院看護福祉学研究科修士課程2005年修了
※現臨床福祉学科

社会福祉士。北海道札幌市出身。2005年修士課程修了時に設立したNPO法人「ゆうゆう24」を、2012年社会福祉法人「ゆうゆう」とし、現職。厚生労働省社会保障審議会障害福祉部会委員、内閣府障害者政策委員会委員、NPO法人全国地域生活支援ネットワーク代表理事、一般社団法人FACE to FUKUSHI代表理事なども務める。北海道医療大学客員教授。

びの機会や学生同士で考えを共有できるような場が増えればと考えます。また、シミュレーターや模擬患者を用いた演習を早い段階から進めることも学習意欲やプロフェッショナリズム向上に役立ち、実践者の養成に効果的だと思います。

母校へ、後輩へ期待すること

黒澤：最後に本学の在学学生、また医療・福祉の道をめざす高校生にメッセージをお願いします。

今原：40年の歴史がある北海道医療大学の卒業生は、それぞれの領域で中心的地位に至る努力をしています。社会に出たときは卒業生のサポートを期待でき、とくに新人から中堅となる伸び盛りのときに確実なアドバンテージとなります。大学を基点とした強固な人脈が根付いていますので社会にでてからのことを心配しないで、有意義な学生生活をおくるのが出来ます。な

お、私は国際化がこれほど進むとは思っていませんでしたので、その反省から、一つだけ申します。社会にでる前には是非、語学を学んでください。とくに英語はある程度の会話力をつけ、場数を踏むこと、読み書きできるようになっていることをおすすめます。

藤川：医師には名医、やぶ医者という言葉がありますが薬剤師はじめ看護師や心理士など一緒に仕事をする他の職種にはまだありません。ぜひ、「名薬剤師」「名看護師」「名臨床心

理士」と呼ばれるような人材が母校の卒業生から出てほしいと願っています。私たち卒業生にインパクトを与えてくれる元気のよい後輩と学会で会えることを楽しみにしています。

三浦：学部時代の勉強は、社会で活躍するためのベースとなる梁づくりだと思います。梁は頑丈であるほど、その後可能性を広げることはもちろん、余裕にもつながります。梁を太くするには手間もひまもかかりますが、学部時代に手を抜くことがなければ、必ず次の展開が目の前に開けてきます。その中には幅広い知識や教養を身につけることも含まれます。大学はそのための最適の場所です。おろそかにすると、社会人になってから後悔することになります。まず、自分の10年後を見据えた梁づくりに励んでください。

中村：私自身、血液やガンなどこれまで様々な分野の研究に携わってきて、歯学部で学んだことの生かし方はいろいろあると実感しています。卒業後に医学・医療分野に貢献する方法は限定されません。もし、進むべき道をしばりきれずにいても、興味があるなら飛び込んでいいと思います。そこで頑張れば広がる世界があり、自分では予想しなかった方向にも道が開けます。医学・医療の懐は案外深いものです。

河村：北海道医療大学は自然も人も大きく、多様性のある豊かな環境です。そこに柔軟性のある面白い学び方があり、チャレンジする機

会もたくさんあります。「？」が出てきたらすぐに答えを知りたがらず、自由な発想と行動に向かってください。見守り、応援し、待っていてくれる先生が必ずいる温かい大学です。自分を枠にはめずのびやかに活躍する後輩と、どこかで出会えることを楽しみにしています。

大原：わざわざ志願して困難なことにチャレンジする、楽しみながらまじめにやる、それを地方と呼ばれる場所でやる、それがかっこよくなる時代になってきています。困難を舞台として、仲間と共に物語をつくる面白さを北海道医療大学で経験してみたいと思います。誰もやったことのないことに挑戦できる機会がたくさんあります。まちづくり、地方再生、もっと大きくこの国のためというテーマで夢をもつこともできます。資格取得も大学で学ぶ目的の一つですが、一度「自分のために」から「人のために」資格を取ると、視点を変えてみてください。するとこれまでとは違うものが見えてきます。私も先輩の一人として、福祉のクリエイティブな面、面白さをどんどん表現し、発信し続けていきます。

本谷：学部学科を超えて縦横斜め、学業でも部活でも広くつながりのできる大学です。卒業後、全国に張り巡らされたネットワークは刺激、励ましになり続けます。「北海道医療大学出身だから安心」といわれるよう、私たち卒業生も頑張っています。後進の活躍に大きく期待します。



千葉 真澄さん

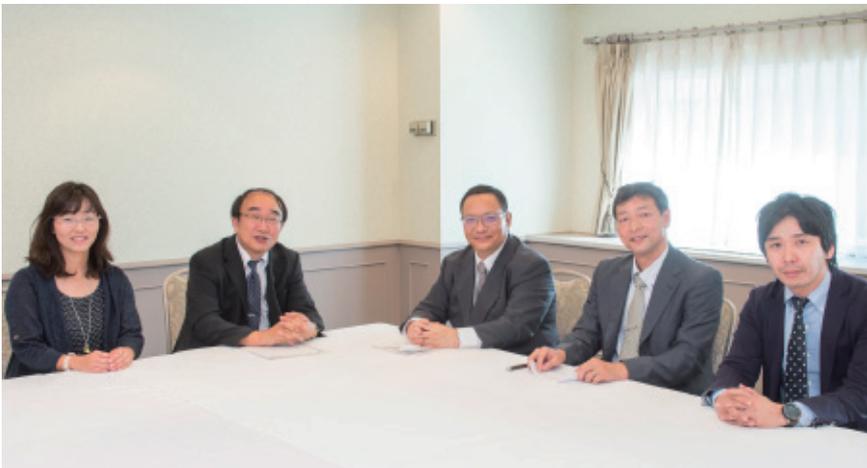
(株)テレビ北海道 アナウンサー

●心理学部臨床心理学科3期生 2008年卒業

北海道札幌市出身。2008年NHK函館放送局入局、アナウンサーとしてのキャリアをスタートさせ、2011年NHK札幌放送局アナウンサー、2012年4月より現職。所属部署は報道制作局報道制作部アナウンス課。

千葉：心理学は実社会で応用がきく学問です。専門職ではなくても、さりげなく職場の雰囲気や明るくしたり、頼りにされる存在になることができると思います。カウンセラーがクライアントを選ぶのではなくクライアントに選ばれるように、アナウンサーの仕事も「私がこの番組に出たい」ではなく「千葉さんにやってもらいたい」といってもらえることが大切な仕事です。たぶんそれは、どの職業でも同じだと思います。心理学を学んで、仕事に限らず、自分と人、人と人のコミュニケーションをスムーズにすることで、明るく、みんなが優しい気持ちをもてる時間、空間をつくる仲間が増えると、とても素敵だと思います。

黒澤：本学の40年を様々な視点で振り返り、次のステップへの励ましも頂きました。卒業生のみなさんの母校への思い、期待に応える大学であり続けるよう歩みを進めていきます。ありがとうございました。



北海道医療大学 40年の歩み

本学の沿革

- 1974年 2月 学校法人東日本学園大学設立
4月 薬学部(薬学科/衛生薬学科)開設(4年制)
- 1978年 4月 歯学部(歯学科)開設
大学院薬学研究科(薬学専攻)修士課程開設
12月 歯学部附属病院開設
- 1982年 3月 アイソトープ研究センター設置
4月 大学院薬学研究科(薬学専攻)博士後期課程開設
- 1984年 4月 歯学部附属歯科衛生士専門学校開設
- 1985年 9月 教養部を当別町に移転・統合
- 1986年 4月 薬学専攻科医療薬学専攻開設
12月 佐々木記念館・総合図書館設置
- 1988年 4月 大学院歯学研究科(歯学専攻)博士課程開設
12月 動物実験センター設置
- 1990年 4月 札幌医療福祉専門学校(看護学科/介護福祉学科)開設
10月 医療科学センター医科歯科クリニック開設
- 1991年 4月 札幌医療福祉専門学校(言語聴覚療法学科)開設
- 1992年 4月 札幌医療福祉専門学校(言語聴覚療法専攻学科)開設
- 1993年 4月 看護福祉学部(看護学科/医療福祉学科医療福祉専攻・臨床心理専攻)開設
- 1994年 4月 学校法人名称・大学名称を変更
(学校法人東日本学園・北海道医療大学)
大学基準協会「維持会員校」認定
5月 医科学研究センター設置
6月 茨戸教育研修センター設置
10月 20周年記念会館設置
- 1996年 4月 薬学部(総合薬学科)開設(学科改組)(4年制)
大学院薬学研究科(医療薬学専攻)修士課程開設
保健管理センター設置
- 1997年 4月 大学院看護福祉学研究科(看護学専攻/臨床福祉・心理学専攻)
修士課程開設
- 1998年 6月 情報センター設置
- 1999年 4月 大学院看護福祉学研究科(看護学専攻/臨床福祉・心理学専攻)
博士後期課程開設
- 2000年 4月 NICEセンター(National and International Collaboration and Extension Center)設置
12月 学友会館設置
- 2001年 9月 札幌サテライトキャンパス開設(札幌市中央区)
- 2002年 1月 個体差健康科学研究所設置(医科学研究センター廃止)
3月 薬学部(薬学科/衛生薬学科)廃止(4年制)
4月 心理科学部(臨床心理学科/言語聴覚療法学科)開設
看護福祉学部(医療福祉学科)を(臨床福祉学科)へ名称変更
- 2003年 6月 心理臨床・発達支援センター設置
- 2004年 3月 札幌医療福祉専門学校閉校
4月 大学院看護福祉学研究科(臨床福祉学専攻)修士課程・博士課程開設
大学院心理科学研究科(臨床心理学専攻)修士課程・博士課程開設
- 2005年 3月 看護福祉学部(医療福祉学科臨床心理専攻)廃止
4月 認定看護師研修センター設置
7月 大学病院・歯科内科クリニック・個体差医療科学センター開設
- 2006年 3月 薬学専攻科医療薬学専攻廃止
4月 大学院心理科学研究科(言語聴覚学専攻)修士課程・博士課程開設
薬学部(薬学科)開設(6年制)
- 2007年 3月 看護福祉学部(医療福祉学科)廃止
4月 大学教育開発センター設置
- 2008年 3月 大学院看護福祉学研究科(臨床福祉・心理学専攻)廃止
4月 看護福祉学部(臨床福祉学科)教職課程開設
- 2009年 8月 北方系伝統薬物研究センター設置
- 2010年 4月 大学院薬学研究科(生命薬学専攻)修士課程開設
歯学部附属歯科衛生士専門学校開設(3年制)
10月 薬剤師支援センター設置
- 2011年 3月 大学院薬学研究科(医療薬学専攻)修士課程廃止
歯学部附属歯科衛生士専門学校廃止(2年制)
- 2012年 3月 大学院薬学研究科(薬学専攻)修士課程廃止
4月 大学院薬学研究科(薬学専攻)博士課程開設
- 2013年 3月 薬学部(総合薬学科)廃止(4年制)
4月 リハビリテーション科学部(理学療法学科・作業療法学科)開設
大学院リハビリテーション科学研究科(リハビリテーション科学専攻)
修士課程開設
12月 国際交流推進室(Global Networking Office)設置
- 2014年 3月 大学院薬学研究科(薬学専攻)博士後期課程(3年課程)廃止
歯科内科クリニック(内科)廃止
4月 医療機関名称変更(北海道医療大学歯科クリニック)
地域連携推進室設置

1974-1984

1974年 学校法人東日本学園大学設立

1970年代初頭、北海道内には70を超える無医村地区が存在し、医科系の総合大学は国立以外皆無であった。この医療過疎を解消したいという道民の切実な思いに応えるために、学園構想は動き出した。「東日本学園大学」の名付け親は、当時の北海道知事・堂垣内尚弘(後に本学第3代理事長就任)。1974年2月18日の薬学部設置認可を受けて、学校法人東日本学園大学が創設。1974年4月23日、薬学部第1期生141名を迎え入れた。

象形の外側の3つのUは、建学理念である知育・徳育・体育の3つの全人格的完成を示すとともに、学部協調を表している。中央に配された図形は東日本のデフォルメであり、また成長繁栄する若い樹林であり、本学学生を象徴している。



音別と当別、2つのキャンパス

大学建設構想は、文化的・産業的基盤の向上につながるプロジェクトを模索していた音別町の意向と合致し、雄大な環境の中に教養課程校舎、学生寮、教職員宿舎などがとけ込む大学村のイメージが練り上げられた。また、専門課程校舎と歯学部附属病院を札幌に隣接する当別町に求めることになった。音別町で地鎮祭が行われたのは、1972年10月10日。この日を大学の創立記念日とし、その後、当別町の1974年薬学部専門校舎、1976年歯学部校舎および同附属病院の地鎮祭も、同じ10月10日に挙行されることとなる。



左) 1978年頃の音別キャンパス。教養部校舎のほか、薬草園、アイススケート場、体育館兼講堂などがあった。
右) 1976年当時、男子寮、女子寮、教職員住宅が設置された大学村。奥に見えるのが教養部校舎。



1974年4月、当別町において現在の金沢地区の町保有地約10万㎡を取得。1975年7月、当別キャンパス薬学部校舎が完成した。

1978年 歯学部開設、歯学部附属病院開院

1978年2月10日、学内関係者はもとより、多くの道民が待ち望んだ歯学部が正式に認可された。歯学部の開設は北海道大学に続き道内で2校目、もちろん私学としては初である。4月17日に行われた入学式には、歯学部第1期生149人が参加した。また、道内の私立大学で初の歯学部附属病院が10月に完成、12月4日開院となった。学生の臨床教育、歯科医学研究のみならず、地域社会の医療福祉の向上が期待されてのスタートである。



左) 1978年10月、歯学部・歯学部附属病院が完成。歯学部附属病院は地下1階、地上6階建ての鉄筋コンクリート造り。治療ユニットは136台を備えた。右) 開院当時の歯学部附属病院待合ホール。

1984年 歯学部附属歯科衛生士専門学校開校

実践的な歯科保健医療の担い手が積極的に求められる中、歯学部附属歯科衛生士専門学校が開校。校舎は歯学部附属病院の東隣に増設した歯学部C棟(別館)の1階・2階に位置し、実習用のユニットやエックス線装置などすぐれた施設・設備を完備した。

1984年5月22日、第1回入学式を実施。2年制で1学年の定員は50名。





左) 1983年頃の当別キャンパス全景。1979年に体育館兼講堂、総合グラウンド、総合食堂、1982年にアイントープ研究センターが完成。1981年、札幌線(現学園都市線)大学前駅が開設。上) 1983年頃の音別キャンパス全景。1985年7月開校、当別での教養・専門一貫教育がスタートした。

1985-1994

1986年 佐々木記念館・総合図書館完成

創設当時の「緑の学園都市構想」に基づき、1970年代後半から、体育館、総合グラウンド、総合食堂の建設など、充実したキャンパスライフを実現するための環境整備に次々と着手。中でも、1986年11月に完成した佐々木記念館・総合図書館は、近代的な佇まいで大学のシンボルの建物となった。旧教養部・旧薬学部・旧歯学部の各図書室を統合。1987年1月から供用開始した。



左) 佐々木記念館・総合図書館は、RC造り地下1階・地上5階建て。25万冊所蔵可能。右) 1985年9月、薬草園の整備が完成(わたなべ山散策路、見晴台)。標本園・栽培園を合わせて3,900㎡。温室内と標本園・栽培園を合わせて約620種の薬用植物を保有。

1990年 札幌医療福祉専門学校開校、 医科歯科クリニック開院

あいの里における札幌医療福祉専門学校と医科歯科クリニックの建設計画は、1989年から着手された。医療・教育・福祉・健康の各分野にわたり、教育研究的資源を地域社会に還元することが目的である。計画通り、1990年4月に札幌医療福祉専門学校が開校。看護学科(3年制)41名、介護福祉学科(2年制)78名が入学した。また、同年10月に医科歯科クリニックが開院。医科診療部、歯科診療部、薬品情報室が設けられ、地域住民への高度な医療サービスと、卒業生の生涯学習支援の体制を整えることになった。1991年からは入院施設を稼働させ、同時に学生の現場指導もできるようにするなど、「教育・研究・医療奉仕」の三位一体が実現した。



左) 1990年4月10日に開校した、札幌医療福祉専門学校。従来の入院看護から在宅ケアへのニーズが高まる中、看護・介護に携わるスタッフを養成し、新たな医療環境をつくりだした意味は大きい。右) 1990年10月1日に開院した、医科歯科クリニック。札幌市街〜あいの里〜当別という医療の連携が確立し、日本都市整備公団が進めていた「あいの里プロジェクト」にも大きく貢献することとなる。

1993年 看護福祉学部開設

建学以来、医療系総合大学の確立を目指してきた中で、全国に先駆けて看護・福祉の4年制学部・学科の設置を計画していた。看護福祉学部の新設は、1992年12月に認可。1993年4月、看護学科80名、医療福祉学科医療福祉専攻90名、同臨床心理専攻51名の学生を受け入れ、ここに第3の学部が誕生した。看護と福祉を統合した学部は全国初の試みで、時代のニーズに即応したものであった。そして、「保健・医療・福祉の連携統合」というテーマを掲げ、これに対応する教育システムを構築した。



上・左下) 1993年4月、第3の学部である看護福祉学部が開校。高齢化社会で求められる全人的ヒューマンケアの担い手を育成するために、従来とは違った新しい看護教育・福祉教育がスタートした。右下) 1993年5月、看護福祉学部開設記念祝賀会を開催。

1993年 21委員会が230の改革提言を発表

1990年代、大学は18歳人口の減少という厳しい時代に突入しようとしていた。さらに、文部省は1991年7月、大学設置基準を大幅に簡素化・大綱化した「新大学設置基準」を施行。この改正は、個々の大学の運営方法によっては、大学間競争に勝ち残れなくなることを意味していた。そうした中、本学ではすでに1990年8月から、大学改革を検討する「21委員会」が活動を開始。看護福祉学部の開設、教育理念「保健・医療・福祉の連携統合」の制定、特色あるカリキュラムへの改善などをはじめとする230項目の改革提言は、1993年3月、「魅力ある大学づくりのために〜東日本学園大学の現状と課題〜」として1冊の本にまとめあげられた。



1994年 北海道医療大学に大学名称変更

21委員会発足の際、「校名検討委員会」が設けられ、本格的な大学名称変更の動きが活発化した。校名検討委員会では、関係方面から寄せられた候補名称を絞り込み、アンケートで印象度・好感度を問うなど検討を重ねた上で、最終的に「北海道医療大学」を新名称とする結論を得た。なお、学校法人名称は学園の歴史を考慮して、「学校法人 東日本学園」に決定した。名称変更は、20周年記念を契機とする1994年4月に実施。それに伴い、1995年3月、JRの駅名も「北海道医療大学」に変更された。



校名変更に伴い新たに制定された校章には、北海道と新校名の欧文表記 Health Science University of Hokkaido の頭文字 HSH の上に北極星をイメージした星を配置。なめらかなカーブを描いて上昇する H は、裾野の広い教育体系に支えられた学生の豊かな人間性や、医療科学・技術の向上を表し、天空の星はそれを導く「光」であると同時に、保健と医療と福祉の連携・統合を目指す大学の教育理念を象徴したものである。



左) 1994年夏の当別キャンパス全景。同年10月に20周年記念会館が完成し、JRの駅とキャンパスがスカイウェイで直結となった。上) 1995年3月、北海道医療大学駅に駅名変更。2012年、学園都市線(桑園～北海道医療大学間)が電化され、札幌駅からの所要時間は最速38分となった。

1995-2004

1997年 大学基準協会の第1回相互評価認定を受ける

国の方針に先行して、自己点検評価体制の確立に向けて動き出していた本学は、大学の評価を行う日本で唯一の民間団体である大学基準協会の第1回「相互評価」に申請し、1997年3月、「大学基準に適合」の認定を受けた。大学としての要件を備え、教育理念・目標の実現に向けて不断の改善・改革が行われていると認定されたのは全国22大学。その中で本学は、北海道・東北の大学として初、また、創設30年未満の大学として唯一であった。

2001年 札幌サテライトキャンパス開設

JR札幌駅から近く、北海道庁を見わたす好立地に2001年9月、札幌サテライトキャンパスがオープンした。生涯学習事業のほか、臨地実習のガイダンス、大学院の講義、同窓会活動、研修会など幅広く活用される活動拠点となった。



札幌市中央区北4条西6丁目の毎日札幌会館ビル6階に開設。ロビー、会議室、研究調査室、講義室2室を設置。

2002年 個体差健康科学研究所開設

学部横断の研究組織「個体差健康科学研究所」が、2002年1月に開設した。個体差健康科学とは、「人それぞれの個性に合った幸福を追求する科学」。オーダーメイド医療への転換が見られる中、各方面から大きな期待を集めた。



「遺伝子機能解析部門」「脳機能解析部門」「再生・再建医学部門」など、社会の要請に応える9部門の研究活動を展開。

2002年 ゆうゆう24開設

学生と住民が交流を深め、地域福祉へ貢献できる活動拠点を。そんな思いのもと、2002年5月、学生のボランティア活動の拠点「ゆうゆう24(当別町青少年活動センター)」が当別町に開設。学生主体の地域福祉活動がスタートした。



学部学科を越えて、延べ1,000人もが学生が開設準備に参加。多彩な活動は、後に全国から評価されることになる。

2004年 創立30周年記念講演会を開催

2004年10月2日、創立30周年記念講演会を開催。1部では、「健康って何だろう」をテーマとした高校生エッセイコンテストの表彰式と記念演奏が、2部では、遺伝子研究分野において著名な3名の先生方の講演が行われた。



記念演奏では本学吹奏楽団が校歌などを演奏。エッセイコンテストでは松井優佳さん(本誌p16)が最優秀賞を受賞。

2002年 全国初の心理科学部開設

人々の心やコミュニケーションに関する社会的問題・事件が頻発する中、これらの問題に対処できる専門職業人の養成が急務とされていた。こうした背景を受け、本学では新しく心理科学部の設置申請を行い、正式認可の承認を得た。医療科学センターや医科歯科クリニックを有する札幌あいの里キャンパスに開設した心理科学部は、2つの点で全国初の学部となった。ひとつは名称そのもの、もうひとつは、臨床心理学科と言語聴覚療法学科というユニークな学科編成である。いわゆる人文系の大学にある心理学系学部とは異なり、心の基本知識を身体科学と対応・関連させたカリキュラムを編成。心の障がいやコミュニケーション障がいなど、現在の社会に顕在する問題に、科学的的手法で対処できる高度な専門職業人の養成を目的とした。



札幌あいの里キャンパスの心理科学部(臨床心理学科、言語聴覚療法学科)開設を機に、2002年、札幌医療専門学校(学生募集を停止した。その後、同校のすべての学生が卒業した2004年3月に同校は閉校。看護学科、介護福祉学科、言語聴覚療法学科の各養成課程は、教育の高度化を目的として、北海道医療大学の学部組織に発展的に組み込まれた。

2003年、2004年 2年連続で文部科学省の大学支援プログラムに選定

2003年、「地域・大学連携による医療系基本教育～ボランティア活動による教育を中心に～」と題されたプロジェクトが、「特色ある大学教育支援プログラム」に採択。「ゆうゆう24(当別町青少年活動センター)」を拠点に、在宅障がい児の一時預かりサービス創設、小中学生の福祉教育との連携、大学の施設利用で知的障がい者の生涯教育に資する「オープンカレッジ」の定期的開催など活動の幅は飛躍的に広がり、学生の学習意欲向上にもつながった。続いて2004年には、「地域への健康支援と融合・連携した学生教育」が「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択。当別町の健康増進計画をサポートするため、2004年8月、JR当別駅前に健診施設「歯の健康プラザ」を設立。大学と行政が一体となって気軽に歯科検診できる体制を整えた。プロジェクトには多くの学生が参加し、教育面でも効果があった。



左上・右上)「ゆうゆう24」を拠点に、学生が地域と一体となってボランティア活動を展開したプログラムが、コミュニケーション力、チーム医療などを学ぶ教育として評価された。左下・右下)当別町民の全員健診を目指した「歯の健康プラザ」では、疾患予防、生活習慣病に対する啓発活動をすすみ、歯学部生も口腔保健指導に参加した。

2005-2014

2005年 北海道医療大学病院開院

医科歯科クリニックの増改築工事、当別キャンパスからの歯学部附属病院病棟・手術室の移設などを経て、2005年7月、札幌あいの里キャンパスに北海道医療大学病院が誕生。高度で安全な医療の提供を通して地域社会へ貢献すると同時に、すべての学部での教育・研究に資する医療施設を目指し、医科部門、歯科部門に加え、医療相談・地域連携室、医療心理室、言語聴覚治療室なども設置。チーム医療、地域医療の実践の場がさらに充実した。



医科と歯科が密接に連携をはかりながら、先進的な医療を提供。4階には手術室と治療室が2室ずつあり、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科などの全身麻酔下での手術、歯科インプラント手術や歯周外科手術などが行われる。

2008年 SCP制度導入開始

学生にも大学生活に関わる各種プロジェクトの企画立案に参加してもらうため、2008年6月、SCP (Student Campus President: 学生キャンパス副学長) 制度を導入。学内施設・サービスの改善やエコ対策など、教職員と学生の協働によるブランディングプロジェクトを開始した。各学部から1名ずつのSCPを選挙により選考。任期は1年。活動費支給、活動室設置など待遇面の整備も行われた。



2013年 リハビリテーション科学部開設

少子高齢化などさまざまな困難を抱える新たな時代を背景に、保健・医療・福祉の分野において貢献する高度なリハビリテーション専門職の養成を目的として、2013年4月、理学療法学科と作業療法学科の2学科から構成されるリハビリテーション学部を開設。これによって本学は5学部8学科となり、医療系総合大学としてさらに進化した。両学科では、医科学系科目の充実、チーム医療の理解と実践など、他学部と連携した教育を展開。また、地域社会に貢献できる人材の育成を目的に、コミュニケーション力の育成や臨床教育も重視している。

2012年7月29日の北海道新聞朝刊に、これからの地域社会と本学リハビリテーション科学部新設に関する記事が掲載。



2007年 札幌医科大学と連携協定締結

さらなる医療の発展に貢献するため、2007年3月、札幌医科大学と教育・学術研究・地域貢献に関する連携協定を締結。そこから生まれたプロジェクトのひとつが、『多職種連携型「メディカルカフェ」の開設による地域医療の向上を目指して』であり、新しい地域医療へのアプローチとして、同年の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選定された。



両大学の学生自らが企画・実践する「メディカルカフェ北海道」を定期的に開催。市民と科学者をつなぐ「サイエンスカフェ」と同様に、地域住民と学生を双方向型医療コミュニケーションでつなぐ場として注目を集めた。

文部科学省に選定された教育改革プロジェクト (2007年～2012年)

- 現代的教育ニーズ取組支援プログラム
多職種参加型「メディカルカフェ」の開設による地域医療の向上を目指して (2007)
- 社会人の学びなおしニーズ対応教育推進プログラム
全人的ケアの視点に立つキャリアアップのための音楽療法講座 (2007)
- 大学院教育改革支援プログラム
科学者実践家モデルに基づく臨床心理学教育 (2007)
言語聴覚士卒業研修プログラムを含む大学院～医療技術系大学院の教育モデル～ (2007)
- がんプロフェッショナル養成プラン
【北海道の総合力を生かしたプロ養成プログラム】～大学、地域、病院の連携を生かしたがん専門医療人の育成～ (2007)
- 戦略的学際連携支援事業
北海道の地域医療の新展開を目指した異分野大学院連携教育プログラムによる人材育成 (2008)
口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考 (2008)
- 社会人の学びなおしニーズ対応教育推進プログラム
地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム (2008)
- 大学教育・学生支援推進事業
「学生キャンパス副学長」との協働によるキャリア・就職支援 (2009)
- 大学間連携共同教育推進事業 (分野連携)
ITを活用した超高齢社会の到来に対応できる歯科医師の養成 (2012)
- がんプロフェッショナル養成プラン
北海道がん医療を担う医療人養成プログラムー地域がん医療の充実と最先端がん研究の推進ー (2012)

2010年 札幌サテライトキャンパスがアスティ45に移転

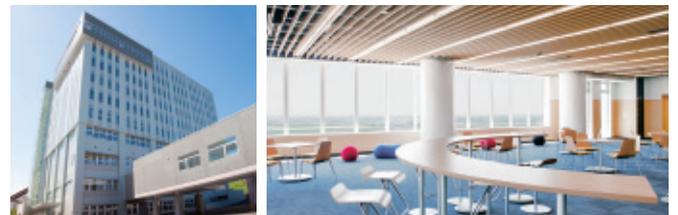
2001年、毎日札幌会館6階に開設された札幌サテライトキャンパスは、生涯学習事業、大学院講義、同窓会活動などの利用の増加にともない、2006年10月に日本生命札幌ビル、2010年4月にはJR・地下鉄札幌駅から徒歩3分のアスティ45 (ACU内) 12階に移転した。



ラウンジ、講義室2室、会議室2室、研究調査室を設置。講義室は、連結するとスクール形式で最大108名収容可能。

2013年 中央講義棟増築完成

リハビリテーション科学部の新設にともない、既設の中央講義棟の増築工事に着手。地上10階建て、本学の新たなランドマークが、2013年3月に完成した。6階と7階には理学療法学科、作業療法学科が使用する実習室が、4階と5階には大講義室やLL教室などが設置された。さらに、最上階の10階には、広大な石狩平野を一望できる展望ラウンジが整備された。



10階のビューラウンジは、全学部学科の学生が自由に活用しており、診療や薬草園見学などのために訪れた地域の方々の憩いの場としても機能。さらに、2014年4月、「ダブルトルカフェ北海道医療大学店」がオープンした。



左) 2013年夏の当別キャンパス全景。リハビリテーション科学部の新設にともない、地上10階建ての中央講義棟が同年3月に完成。右) 2013年夏の札幌あいの里キャンパス全景。医科歯科クリニックは増改築工事などが行われ、2005年7月、北海道医療大学病院として新たにスタート。



学校法人東日本学園 北海道医療大学 創立40周年記念講演会を開催

7月27日(日)、本学創立40周年を記念し、北海道大学名誉教授・鈴木章先生を講師にお招きした講演会「ノーベル化学賞を受賞して」を開催しました。会場は一般の方200名、本学学生400名、教職員150名、計750名が集い、満席となりました。

《創立40周年記念講演会》

2014年7月27日(日)

13時～15時

会場：ニューオータニイン札幌



- 開会
- 学校法人東日本学園
北海道医療大学40年の歩みと現況
- 挨拶 学校法人東日本学園理事長
東郷 重興
- 記念講演
『ノーベル化学賞を受賞して』
講師：北海道大学名誉教授
鈴木 章 氏
座長：北海道医療大学学長
新川 詔夫
質疑応答
- 感謝状贈呈



40周年を記念して

講演に先立ち、本学の沿革をスライドを用いてご紹介しました。1974年の薬学部開設に始まり、5学部8学科、大学院、専門学校合わせ学生3,470名が学ぶ規模となるまでの40年間を振り返り、現在進行中の中長期計画「2020行動計画」などの取り組みを紹介、未来に向けてさらにダイナミックに前進していくことをお約束しました。

続いて東郷理事長が挨拶し、一通りの学部学科編成をとのえた本学は、これからますます医療系総合大学としての教育力を発揮してチーム医療の担い手を育成すると抱負を語り、参加者へは、この講演会を広く先人の経験に学ぶ機会としてほしいとメッセージを送りました。

聴衆の心をつかんだ講演会

座長を務めた新川学長の鈴木章先生の略歴紹介に続いて鈴木先生が登場、およそ1時間お話し頂きました。人生を決めた2冊の本との出会い、1979年に発表し、約30年後にノーベル化学賞を受賞することとなった「鈴木カップリング反応」の概要や具体的応用例といったアカデミックな話題から、ノーベル賞の裏話まで、わかりやすく時に楽しいお話に参加者は熱心に聞き入りました。

講演後の質疑応答では、本学学生、一般の方からの質問に丁寧にお答えくださり、学生にはエールも送っていただきました。

最後に東郷理事長より鈴木先生へ感謝状を贈呈し、40周年記念講演会は盛会の内に幕を閉じました。

ご挨拶



学校法人東日本学園理事長
東郷 重興

本日は多数お集まり頂きありがとうございます。本学は開学以来教育環境整備に尽力して参りましたが、その目的は一貫してチーム医療の実践者の育成にあります。専門性を越えて学生が交流し、互いに切磋琢磨する環境づくりを進めて40年、本学の医療系総合大学としての真価はこれから発揮されようとしています。5学部8学科となった昨年は専門分野以外の知識吸収を図る多職種連携カリキュラムをスタートさせました。同時に、市中の大病院との連携を強めて実地研修をさらに充実させ、大学で得た知識を現場で確かめる、学びから実践へ至るプロセスも重視しています。

本日は鈴木章先生に40周年を記念してお話頂けることになり、大変うれしく思います。皆様も、分野間の枠を越えて先生のご経験に学ばせて頂く気持ちでご静聴お願いします。

創立40周年記念講演 『ノーベル化学賞を受賞して』

人生を決めた2冊

北海道医療大学40周年おめでとうございます。40周年の記念に講演させて頂くことを光栄に思います。

私が入学した頃の北海道大学は、入試は理系と文系の枠だけ、1年半は教養課程で、理系は理科一般を勉強し2年次の試験で進む学部学科を決めました。このシステムが、数学が好きで理学部で数学をやっていた私が有機化学を選ぶきっかけを作りました。とくに2冊の本との出会いで、私の研究人生は決まりました。

最初は「Textbook of Organic Chemistry」(L.F.Fieser and M.Fieser著)。教養課程・理系の教科書でした。原書は高価でしたが、アメリカの著者の提案により日本の丸善が紙質を落として発売した廉価版でした。訳本などありませんから約750ページ、辞書を引き引き読みました。そして、「有機化学は非常に面白い!」と感動しました。何度も読み、裏表紙の内側に「正」の字を書いてカウントしました。33回の印が残っていますが、実際はこれ以上です。この本で私は有機化学を勉強しようと決めました。

もう1冊は「Hydroboration」(H.C.Brown著)。理学部助手の頃、書店で装丁に目が留まった、ホウ素化合物生成の方法が書かれた本です。私は有機合成化学に興味を引かれ、その後の研究につながりました。著者のブラウン先生は後に私のアメリカの恩師になります。

この2冊の本と出会わなければ現在の私はありませんでした。

博士研究員としてアメリカへ

1963年から2年間、アメリカ・インディアナ州のパデュー大学に博士研究員として赴き、「Hydroboration」の著者ブラウン先生のもとで有機ホウ素化合物を学びました。私はそれを有機合成に使う方法を考えていました。有機ホウ素化合物は非常に安定しているため有機合成の原料には使えないというのが世界の常識でしたが、私は何か工夫があるはずだと考えていたのです。そして、アメリカから北大に戻って研究を続け、「鈴木カップリング反応」を見つけました。有機ホウ素化合物と有機ハロゲン化合物に塩基を加える

身近な技術、鈴木カップリング反応

と反応が起こることを見つけたのです。

有機化合物は炭素が複数結合したものです。分子式が同じでも構造の違う異成体が多く、作るのが困難です。それまで一般的だった有機金属化合物と有機ハロゲン化合物を反応させるクロスカップリングやウールマン反応などには大きな短所がありました。しかし1979年に発表した「鈴木カップリング反応」は水に安定、そして毒性がないという大きなメリットを持ち、世界で「スズキ・カップリング・リアクション」と呼ばれ広く応用されています。

医薬品では高血圧治療薬、アメリカ・メルク社のロザルタン、日本で350万人、世界で2,200万人が使うスイス・ノバルティス社のバルサルタン。抗がん剤や抗HIV薬、抗生物質の製造にも使われています。農業分野ではドイツ・BASF社の殺菌剤ボスカリド、バイエル社の種子処理剤ピキサフェンなどの数百トン単位の製造に使われています。他に、テレビや携帯電話で身近な液晶、有機ELディスプレイの発光体が従来より安価に製造されています。

ノーベル賞受賞エピソード

2002年、2003年とアメリカの恩師、ブラウン先生が私を化学賞候補としてノーベル委員会に推薦してくださいました。ノーベル賞は委員会が世界中の研究者に推薦を依頼して選考します。自薦は不可です。私も3回ほど依頼を受けて他の研究者の推薦文を書いたことがあります。2004年、ブラウン先生が92歳で亡くなられたからは、ノーベル賞のことは考えもしませんでした。

受賞の知らせは2010年10月6日、自宅への電話でした。家内が取った最初の電話はすぐに切れたそうです。まもなく2回目が鳴り私が出ると、ノーベル委員会理事長からでした。受賞を知らされ、正式発表まで家内以外には口外せぬよう念を押されました。ノーベル委員会の情報管理は徹底していて、選考資料も50年間は厳重に保管され公にされないと言われました。

ノーベルの命日12月10日を挟む1週間、ストックホルムはノーベルウィークに沸いていました。8日はストック

40
1948-2018
Hokkaido University of Health Sciences
学校法人東日本学園
北海道医療大学
創立40周年記念講演会

演題
ノーベル化学賞を受賞して

講師
鈴木章氏
北海道大学名誉教授

入場料
無料

と き
7月27日(日)
午後12:00開演 13:00

と ころ
ニューオータニイン札幌
「鶴の間」
札幌市中央区北2条西11丁目1-1 TEL.011-822-1111

プログラム

13:00 開会
司 会 学校法人東日本学園 北海道医療大学40周年記念講演会実行委員会 事務局長 藤田 隆雄
13:30 記念講演 皇典 北海道医療大学 新川 昭夫
「ノーベル化学賞を受賞して」 講師 北海道医療大学 鈴木 章
15:00 閉会

TEL.0133-22-2111 FAX.0133-23-1669
E-mail:kouen@hokkaido-u.ac.jp
〒060-0811 札幌市中央区北2条西11丁目1-1 北海道医療大学40周年記念講演会事務局

北海道医療大学
Hokkaido University of Health Sciences

北海道大学名誉教授 鈴木章氏 プロフィール

1930年、北海道むかわ町生まれ。60年北海道大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。北海道大学理学部助手、工学部助教授、教授を経て、94年より北海道大学名誉教授。1979年に発表した「鈴木クロスカップリング反応」は、水に安定で毒性がないなど数々の長所によって高血圧治療剤や抗がん剤など医薬品、農業、液晶や有機ELディスプレイ製造など幅広い分野で利用され、2010年ノーベル化学賞受賞に至る。その他にも、2004年日本学士院賞、05年瑞宝中綬章、10年文化功労者・文化勲章、11年米国化学会H.C.Brown Awardなど受賞・受章多数。2005年より日本化学会名誉会員、11年より日本学士院会員、12年より英国化学会名誉フェロー。

クホルム大学の講堂で専門家から一般市民までが受賞者の講演を聴くノーベルレクチャーが開催されました。授賞式は10日です。コンサートホールで一人ずつ国王からメダルとディプロマ(賞状)を受けました。メダルは18金製1個の他にブロンズ製を3個頂戴しました。初めメダルは純金でしたが、軟らかく変形しやすいため18金になったそうです。式後は市役所ブルールームでノーベル委員会主催の夕食会で、なんと1,370人が集いました。翌日の王宮での国王主催の夕食会の参加者は180人ほどでした。

私はノーベル賞をめざして勉強を続けたわけではありません。しかし、思いがけずノーベル化学賞の光栄に浴し、大変うれしく思います。北海道から初めての受賞者となりましたが、私のあとに何人も続いてくれることを願っています。

『質疑応答』学生からの質問への答え

- Q. 大きな話題になっているSTAP細胞についてどうお考えですか。
- A. よく受ける質問です。サイエンスは再現性が基盤の一つ、判断することは簡単です。再現性があるかどうかです。
- Q. 長年にわたりの分野で夢を追い続けるヒケツを教えてください。
- A. 研究は成功の確率が低いのが当たり前です。でも、興味がある、面白いと思えたら、失敗しても、違う方法

を考え、次に進めます。面白いと思う気持ち、興味をもち続けることを大切にしてください。そのために生半可ではなく、深く勉強することが大切です。

- Q. これからの医療従事者に望むことはありますか。
- A. 医療従事者はすべての人間の生存に関わる重要な職業です。そのために、医師、薬剤師、看護師ほかすべての医療従事者が協力して、チームの総合力で最高の成果を挙げてほしいと思います。期待しています。



OG訪問

40周年記念編
看護福祉学部看護学科

今回は特別編として、2004年に行われた本学創立30周年記念「高校生健康エッセイコンテスト」で最優秀賞に輝いた松井優佳さんを訪ねました。当時高校3年生だった松井さんは、翌年本学へ入学、現在は看護師として活躍中です。

市立札幌病院(札幌市) 看護師

松井 優佳 さん(看護福祉学部看護学科2009年3月卒業)



高3でエッセイを書く

松井さんと本学のご縁は10年前。2004年8月、看護師を志す受験生だった松井さんが本学への資料請求で創立30周年記念事業「高校生健康エッセイコンテスト」を知ったことに始まります。松井さんには書きたいテーマがありました。大好きなおばあさまとの関わりを通して感じ、考えてきた「健康」「幸せ」です。推敲を経て応募した作品『祖母から学んだこと』は、最終審査員5人のうち4人が最高点を付け、見事最優秀賞に輝きました。高齢者の幸せな生き方という重いテーマに気負うことなく自然体で向き合い、素直な文章でまとめた作品でした。

最優秀賞の受賞を知ったのは新聞紙上だったといいます。「母と『発表、今日だったね』と話しながらめくった朝刊に私の名前が載っていて、びっくり!午後になって受賞を知らせる速達と大学からの電話を受けて、ようやく実感が湧きました」と笑いながら振り返ります。

本学のオープンキャンパスにも参加して、自由な雰囲気や日常的にある他学部との交流に魅力を感じていた松井さんは、この受賞をきっかけに本学を第一志望に決め、翌春、看護学科へ入学しました。



89歳になったおばあさまと松井さん。認知症は進んでも明るく生きる姿はいまも人生の師。大学の4年間、おばあさまがデイケアに通う施設でボランティアを続けた松井さんを「孫なのよ」と周囲に誇らしげに紹介していたそうです。



大学の老年看護学実習ではひな祭りを企画。参加者が一体になれるよう工夫を凝らした取り組みは、実習先の病院、先生から高く評価されました。

本学で看護を学ぶ

おばあさまとの温かい関わりの中で体験から多くを学び、本当の健康、本当の幸せを考え、実践するケアという明確な理想をもっていた松井さんは、本学で出会い、学び、楽しむ4年間を過ごしました。吹奏楽部では学部を越えた仲間をつくり、老年看護学ゼミでは熱い思いを共有する仲間、さまざまな理想を体現して示してくれる先生方と出会えたといいます。さまざまな病院で看護師として働く大学の同期とは、卒業後5年を経ても月に1度は集まって食事をしているそうです。

「自慢の母校です」と松井さん。「実際に働いてみて、看護の仕事は感性が問われるのだとわかり、それがちゃんと大学で磨かれてきたと気づきました。技術は練習を積めば獲得できますし、遅れても頑張りを取り戻せますが、自由な発想や豊かな感性は多彩な経験の中でしか身につかないものです。医療大学の先生

方は、課題は出しますが、自分たちで調べなさい、考えなさい、やってみなさい、と見守ってくださいました。グループワークも多く、視点や思考の多様性を知り、尊重し合う大切さも知りました。大学で身についた調べる力、考える力、発想する力、協働する力に、いま、とても助けられています」。

看護師になる

現在、松井さんは市立札幌病院の腎臓内科・呼吸器内科・血液内科の混合病棟の看護師です。53床ある病棟にドクター11人、看護師は28人、薬剤師が3人います。日々の看護は病棟の患者さん全員が対象ですが、常時2、3人の患者さんの担当看護師として看護(指導)計画を作成し管理しています。

看護の根底にあるのはおばあさまが教えてくれた「幸せ」。担当患者さんの多くは退院後も通院と自己管理が必要ですが、「病があっても健康的に」、前向きに暮らせる支援を考えます。終末期の患者さんには、いま生きている喜



松井さんが声をかけると、病棟師長(前列右から3番目)もドクター(男性全員)も、多忙なか、快く撮影にご協力くださいました。みなさん松井さんのエッセイのことは「初耳!」だったそうです。



担当患者さんの退院に向けた生活指導をする松井さん。「傷が治る過程がわかる外科のように目に見えた変化に乏しいと思われがちな内科ですが、看護師の介入による患者さんの内面的変化はしっかりと実感できます。やりがいです」。

びを感じられるようにできることに取り組みます。今年松井さんは、酸素ボンベを離せない終末期の患者さんの「外出したい」という思いを、主治医やチームメンバー、リハビリスタッフと連携しさまざまな課題を越えてかなえました。「病院の周りの散歩や近くのショッピングセンターへの外出でしたが、久しぶりのショッピングに患者さんが満面の笑みで『最高です』とおっしゃってくれました。最初から不可能だと決めつけないことの大切さをこのケースで教えられました」。

■ 極めるために

病棟で担当することの多い腎臓疾患の患者さんのために専門性を高めたいと、松井さんは自ら希望して年に2回、腎臓疾患関連の学会で最先端を学んでいます。今年度から腎臓内科の患者さんを中心としたチームのリーダーも務めるようになりました。勤務先は腎臓移植手術数で全国トップクラスの実績をもつ病院ですから、「いつか移植の分野でも働いてみたい」という意欲もぞかせます。

自ら機会をつくり、前進している松井さんに、エッセイを書いた当時の自身の変化を尋ねてみると、笑いながらこう答えてくれました。「変わっていないです。友だちにも全然変わらないねといわれます。あえていえば、10年前は看護師をめざしていたのが、いまは実際に看護師として働いていることです

ね」。大学進学、就職と大きな出来事を経験しながらも、確かな「軸」があるから右往左往することのない10年間だったようです。

「祖母の介護が原点です」(松井さん)。高校生の時のエッセイに表れていた他者の人生への温かいまなざしは、いまは、看護の仕事として表現されています。



ナースステーションでのカンファレンス。「情報共有はもちろん、小さなことでも一人で考えずに相談します。異なる経験や視点が思いがけない解決策に導いてくれるたび、看護は一人ではできない仕事だと感じます」。松井さんの右は今年本学を卒業した阿部千紘さん。セミの後輩です。

◆ 10年前に書いたエッセイ

北海道医療大学創立30周年記念事業 高校生健康エッセイコンテスト《最優秀作品》

祖母から学んだこと

北星学園女子高等学校 (北海道) 松井 優佳

私には現在七十九歳の祖母がいる。八年前、私たちは祖母と一緒に暮らすために祖母の家を増築して引っ越してきた。

祖母は、住み慣れた土地を高齢になってから転居してきたために、それまでと同じ様な近所付き合いができなくなってしまい、寂しそうにしていた。そのような祖母を両親は心配して、区役所に相談に行ったところ、家から一番近いデイグリーネンというデイケア施設に通ったらどうかと薦められた。いつも家族の後ろをついて歩いていた祖母が、実際デイケアを見学してみても参加したいと言った。デイケアでは、自分の趣味であるお花や陶芸をしたり、友だちとの交流を楽しむことができ、最初は週に一回の通所であったはずが、いつのまにか週五回まで増えていた。

祖母は軽度の痴呆症である。そのため、自分の身の回りのことを全て自分一人ではできない。私の父は毎朝祖母を起こしに行く。母はデイケアに行くまでの準備を手伝い、家の片付けなどをする。私は毎晩祖母に会いに行き、今日あったことなどの話をし、明日の予定と夕食後の薬を飲み忘れないかの確認をする。私の弟は、一緒に外出した

時など足の悪い祖母が歩行に困難を感じていたらさりげなく手を差し伸べている。私達家族は、祖母の痴呆症を進行させないためにも、自立を促す手助けを考えている。

現在祖母はデイケアに行くとなると、化粧などの身支度を整え張り切って出掛けて行く。以前は消極的だった祖母が、沢山の人と触れ合うことで意思表示をしっかりとし何ごとにも積極的になった。祖母は自分の家が一番だと言っている。私達家族はいつまでも祖母が楽しそうに自宅からデイケアに通ってもらいたいと思っている。

何気ない言葉一つが喜びに繋がることも悲しみに繋がることもあるということ、相手が何を求めているのか、どんな些細なことでも相手のためになるかを考えて手を貸すことなど、祖母の介護を通して沢山のことを学ぶことができる。これらの経験は、私が将来進みたい道にとっても役に立つ宝物になると思う。

デイケアは沢山のスタッフや多くのボランティアによって作られている。デイケアが主催する行事に私も参加させてもらったが、皆が楽しめることを皆で作っているのだなと実感した。人はいくつになっ

ても人と人の繋がりが大切なもので、人は人によって支えられているのだと思う。

何一つ不自由のない生活だけが本当の幸せなのだろうか。祖母はいつも自分は幸せだと口にしていて、自分が幸せだと思えることが健康であることなのかもしれない。充実した生活を送ることで幸せを感じることができて、それが健康であることにも繋がっていくのではないかと私は思う。またそれは、沢山の人のによって作られていることも忘れてはいけない。



エッセイコンテスト表彰式で当時の学長・廣重力先生より表彰状を受け取る松井さん。コンテストには全国から720名の応募があり、松井さんの最優秀賞1点の他、優秀賞8点が選ばれました。



教員役職者・新任教員紹介

新任教員

平成26年7月1日付

看護福祉学部 助教(看護学科 地域保健看護学/地域看護学) 小原 瑞恵

平成26年8月1日付

看護福祉学部 助教(看護学科 母子看護学/母性看護学) 渋谷 雅美

平成26年10月1日付

歯学部 任期制助手
(口腔機能修復・再建学系(歯周歯内治療学)) 新山 恵里

昇任教員

平成26年7月1日付



歯学部准教授
(口腔生物学系(生化学))

荒川 俊哉 (あらかわ としや)

PROFILE

琉球大学医学部保健学科卒業。徳島大学大学院栄養学研究科博士前期課程修了。博士後期課程修了。Postdoctoral Fellow, Michigan State University, USA, 明海大学歯学部解剖学第一教室助手、本学歯学部講師等を経て、准教授就任。栄養学博士。



心理科学部講師
(臨床心理学)

金澤 潤一郎 (かなざわ じゅんいちろう)

PROFILE

久留米大学法学部卒業。本学心理科学部臨床心理学科卒業。同大学院心理科学研究科臨床心理学専攻修士課程。博士課程修了。札幌医科大学非常勤職員(研究支援者)、日本学術振興会特別研究員(DC2)、本学心理科学部臨床心理学助教等を経て、講師就任。臨床心理学博士。

平成26年10月1日付



薬学部教授
(生命科学講座)

村井 毅 (むらい つよし)

PROFILE

本学薬学部卒業。同大学院薬学研究科修士課程修了。財団法人食品薬品安全センター薬野研究所、本学薬学部助手、ハワイ大学化学科客員研究員、本学薬学部講師、准教授等を経て、教授就任。薬学博士。



薬学部教授
(薬理学講座)

飯塚 健治 (いづか けんじ)

PROFILE

埼玉医科大学医学部卒業。岩見沢労災病院内科、国立函館病院循環器科勤務。北海道大学大学院医学研究科病態医学科学分野助手、本学薬学部准教授等を経て教授就任。医学博士。

北海道浦河高等学校と高大連携協定を締結しました

平成26年8月8日(金)、本学において北海道浦河高等学校小島晶夫校長と本学新川学長により、高大連携に関する協定の調印式が行われました。

この協定は、浦河高等学校と本学が相互に連携して、以下の連携事業を実施することで、「大学の持つ知的財産を広く社会に還元し、地域社会の発展に貢献すると同時に、次代を担う高校生に対して早い時期から保健・医療・福祉の学問領域について興味・関心を育む機会を提供し、本学の教育内容への理解を深めること」を目的としています。

- 大学と高等学校の教育活動(授業等)に対する支援
- 大学と高等学校との共同研究の実施
- 大学と高等学校との連携に係わる既存施設・設備の利用
- その他、必要とする連携



調印を終えた新川学長(左)と小島校長(右)

中山大学(中国広東省広州市)と本学歯学部が学術交流協定を締結しました

平成26年6月27日(金)、中山大学(中国広東省広州市)において、中山大学口腔医学院(歯学部)と本学歯学部との学術交流協定の調印式を行いました。

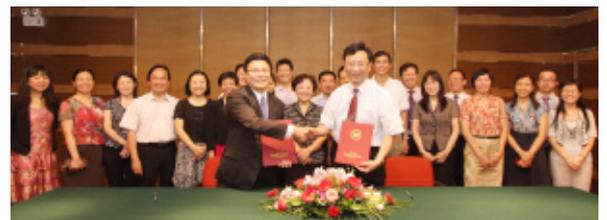
本学からは、齋藤歯学部長と国際交流推進室の戸根谷係員が参列しました。

中山大学の凌均榮名誉学院長、程斌副学院長、そして本学、齋藤歯学部長のスピーチ後、協定書への調印と記念品の交換が行われました。

また、調印式終了後には、齋藤歯学部長による特別講演が行われました。

中山大学は中国の民主革命家である孫文(孫中山)により1924年に創設されました。25学部(学院)を有し、医療系学部は歯学部(口腔医学院)、中山医学部、公衆衛生学部、看護学部、基礎医学部、薬学部を擁する政府から重点校に指定される学生総数8万多名の総合大学です。

交流協定の調印により、両大学の学生や教員による学術研究交流の今後の展開と、より良い関係構築が期待されます。



台北医学大学短期留学プログラムの 報告会が行われました

本学と台湾・台北医学大学との協定に基づく「短期留学プログラム」が8月4日(月)から8月29日(金)までの4週間にわたり実施され、台北医学大学薬学部から、2年生の陳 章綾さん、陳 映羽さんの2名、同大学歯学部から4年生の田 俊文君、阮 珮珍さん、朱 颯怡さんの3名が来学しました。

本プログラムでは、本学での授業をはじめ、薬学部では学外の調剤薬局見学実習、歯学部で



は本学大学病院の見学等、それぞれ学部の特色を活かした研修を行い、日本と台湾の薬学、歯学教育の違いを学びました。

8月28日(木)には報告会が開催され、4週間の授業や実習など短期留学の成果について、各学部ごとに発表しました。最後に新川学長から本プログラムの修了証明書がそれぞれに手渡されました。

報告会終了後には懇親会が行われ教員の他、交流のあった学生たちと共に留学中の思い出話を花を咲かせ、本プログラムの終わりを迎えました。

台北医学大学との連携は年々強化されており、来年度には看護福祉学部でも受入を予定しています。また、来春には本学薬学部、歯学部、看護福祉学部から学生を台北へ派遣する予定です。

本交流事業の充実が国際的な医療人の育成に資することを期待します。



発表会の様子(歯学部)。



懇親会ではこの1か月の思い出を大いに語ってもらいました。

サハリン州副首相・保健省大臣が来学しました

8月27日(水)に、サハリン州のトルネフ副首相、ズブコフ保健省大臣、クヴォイ在札幌サハリン州代表ほか補佐官2名が本学を訪れました。本学は昨年12月に国際交流推進室を開設し、サハリン州との交流を目指す状況の中で、今回の訪問は北海道経済部



左からクヴォイ在札幌代表、トルネフ副首相、ズブコフ保健省大臣。

国際経済室のコーディネートによって実現しました。本学は黒澤副学長、半田国際交流推進室長および鈴木事務局長ほか、教職員総勢8名で迎えました。

交流に向けた協議では、双方それぞれが現時点での提案を行うとともに、今後期待する内容について意見交換を行いました。

今回の意見交換は、今後、本学がサハリン州と交流を進めるにあたり重要なものであり、双方の提案内容と今後の期待する内容を議事録として調印し、「実質的で具体的な交流」の早期実現を目指す課題として共有する運びとなりました。

内容の濃い意見と提案の交換の後には、歯学部の

実習室を見学し歯科医師養成の設備やリハビリテーション科学部が持つ最新の实習室であるバリアフリーラボを見学して本学訪問のスケジュールを終了しました。



歯学部の実習室を半田室長が説明している。

アルバータ大学から薬学部長が来学しました

カナダ・アルバータ大学は1993年に本学が初めて交流提携を締結した海外の大学で、研究交流や学生交流をはじめ毎年夏季休業中には語学研修を実施しています。

4月22日(火)にアルバータ大学からKehrer薬学部長とCox生涯教育担当が本学を訪れました。ランチミーティングでは、共同研究や若手研究者の派遣、学生交流について話が持たれました。

ランチミーティングの後には、新川学長、黒澤副学長を表敬訪問し、今回の来学についての報告や本学の印象などについて歓談し、最後に新川学長から訪問のお礼に対するプレゼントが手渡されました。

その後、図書館大会議室を会場として、Kehrer薬学部長によりアルバータ大学薬学部の教育の内容や方針、研究者について、またCox先生からはカナダの医療制度と薬学教育を通じたアルバータ州における人材育成の方向性についてプレゼンテーションがあり、参加した本学の教員や学生からは、留学や教育内容について積極的に質問がされ関心の高さを伺い知ることができました。

訪問スケジュールの最後に臨床薬学実習室や中央講義棟を見学し、今回のスケジュールを無事に終えることができました。

今回の訪問をきっかけに、これまで続いている

語学研修はもとより、留学や研究交流がより一層前進することをお互いに確認する良い機会となりました。



2015年度 入試概要

本学独自の「夢つなぎ入試」で経済的支援

経済的理由により大学進学が困難な状況にある受験生を支援するため、初年度入学金の全額と授業料の半額を免除する「夢つなぎ入試」を、一般後期・センター後期入試において実施します。

「薬学教育・研究者育成奨学生」

「歯学部特待奨学生」

「福祉・介護人材育成奨学生」は学納金が大幅に減免

薬学部と歯学部では、将来、薬学教育・研究を支える、もしくは歯科医学・歯科医療の分野をリードするという高い志を持った方を支援するため、卒業までの学納金を国公立大学と同水準とする制度を実施します。「薬学教育・研究者育成奨学生」はセンター前期A・一般後期入試において、「歯学部特待奨学生」はセンター前期A・一般後期B入試において募集します。

また、臨床福祉学科では、人材不足が社会問題となっている福祉・介護専門職の人材育成を図るため、卒業までの学納金が90万円となる「福祉・介護人材育成奨学生」制度を実施します。一般前期・センター前期A・センター前期B入試において募集します。

一般前期入試は「試験日自由選択制」を導入

一般前期入試は1月30日と1月31日の2日間実施しており、両日とも受験できるのでチャンスが2回あります。検定料は両日受験でも1日のみの受験でも一律3万円。複数学科の併願も可能で、すべての学科を受験しても追加の検定料は一切かかりません。(1日の受験で併願できる学科には制限があります。詳しくは学生募集要項をご覧ください。)

一般前期入試は全国12会場で実施

一般前期入試は札幌、旭川、帯広、北見、函館、青森、秋田、仙台、東京、名古屋、大阪、福岡の全国12会場で実施します。

センター利用入試はチャンスが3回

前期A、前期B、後期の3回実施しています。大学独自の個別試験は行わず、本学が指定する科目の大学入試センター試験の得点のみで合否判定を行います。

また、同一入試形態内での併願が可能。追加の検定料はかかりません。さらに前期AとBの両方の入試形態に出願することもできます。

一般入試とセンター入試の併願が可能

一般前期入試とセンター前期A・B入試の併願や、一般後期入試とセンター後期入試の併願ができます。

合格のチャンスは合計7回

全学部全学科でAO方式入試、推薦入試(一般・指定校)、一般前期入試、一般後期入試、センター前期A・センター前期B・センター後期入試の合計7回の入試を実施します(歯学部は一般後期B入試を加えた8回)。

歯学部・臨床福祉学科ではAO方式入試Ⅱ期・Ⅲ期を実施

AO方式入試Ⅱ期の出願受付を2014年10月1日(水)から11月28日(金)まで、Ⅲ期の出願受付を2014年12月1日(月)から2015年3月26日(木)まで行っています。

インターネット出願を実施

センター前期B入試、一般後期入試、センター後期入試で実施しています。詳細は、学生募集要項でご確認ください。

2015年度 北海道医療大学入試概要

	募集定員	薬学部	歯学部	看護福祉学部		心理科学部	リハビリテーション科学部			
		薬学科 【募集定員 160名】	歯学科 【募集定員 80名】	看護学科 【募集定員 100名】	臨床福祉学科 【募集定員 80名】	臨床心理学科 【募集定員 75名】	理学療法学科 【募集定員 80名】	作業療法学科 【募集定員 40名】	言語聴覚療法学科 【募集定員 60名】	
AO方式入試 ※1	募集定員	17名	20名	6名	15名	10名	10名	5名	12名	
	試験日	2次:2014年10月11日(土)								
	合格発表日	1次:2014年10月2日(木) 2次:2014年10月17日(金)								
	試験会場(受験地)	本学(当別キャンパス)								
推薦入試	募集定員	一般20名 ※2 指定校特別25名	一般8名 ※2 指定校特別8名	一般16名 ※2 指定校特別16名	一般10名 ※2 指定校特別14名	一般10名 ※2 指定校特別10名	一般10名 ※2 指定校特別10名	一般5名 ※2 指定校特別5名	一般7名 ※2 指定校特別7名	
	試験日	2014年11月9日(日)								
	合格発表日	2014年11月14日(金)								
	試験会場(受験地)	本学(当別キャンパス)・帯広・北見・函館・仙台・東京・大阪・那覇 ※ただし、指定校特別推薦は一部会場のみ。								
一般前期入試	募集定員	65名	25名	40名	23名	24名	30名	14名	14名	
	試験日	2015年1月30日(金)・2015年1月31日(土) ※3 試験日自由選択制								
	合格発表日	2015年2月11日(水)								
	試験会場(受験地)	札幌・旭川・帯広・北見・函館・青森・秋田・仙台・東京・名古屋・大阪・福岡								
一般後期入試 ※歯学部のみ	募集定員	5名	一般後期4名 一般後期B5名	5名	5名	4名	4名	2名	4名	
	試験日	2015年2月28日(土)	2015年2月28日(土) 一般後期 2015年3月18日(水) 一般後期B	2015年2月27日(金)						
	合格発表日	2015年3月7日(土)	2015年3月7日(土) 一般後期 2015年3月20日(金) 一般後期B	2015年3月7日(土)						
	試験会場(受験地)	札幌・東京・大阪								
センター前期A入試	募集定員	15名	5名	8名	6名	8名	7名	4名	8名	
	試験日	本学独自の個別試験は実施しない								
	合格発表日	2015年2月11日(水)								
センター前期B入試	募集定員	10名	3名	6名	4名	6名	6名	3名	6名	
	試験日	本学独自の個別試験は実施しない								
	合格発表日	2015年2月11日(水)								
センター後期入試	募集定員	3名	2名	3名	3名	3名	3名	2名	2名	
	試験日	本学独自の個別試験は実施しない								
	合格発表日	2015年3月7日(土)								

※1 歯学部・臨床福祉学科はⅡ期、Ⅲ期の出願があります。 ※2 指定校特別推薦は指定校制です。募集要項等は、直接指定校のみに配布しますので、詳細は各高等学校へお問い合わせください。
※3 一般前期入試の試験日は2日間設定しており、出願時に希望する試験日を登録できます。

センター利用入試(前期A)の指定教科・科目

学部・学科	教科	科目
薬学部 (薬学科)	外国語	「英語」
	数学	「数学I-A」、「数学II-B」から1科目選択 ※旧教育課程履修者の内希望する者[旧 数学I-A]、 [旧数学II-B]から1科目の選択可
	理科	「化学基礎」、「生物基礎」、「物理基礎」から2科目選択または 「化学」、「生物」、「物理」から1科目選択 ※旧教育課程履修者の内希望する者[化学I]、「生物I」、「物理I」から1科目選択可
看護福祉学部 (看護学科/臨床福祉学科)	外国語	「英語」
心理科学部 (臨床心理学科)	数学・国語	「数学I」、「数学I-A」、「数学II」、「数学II-B」、「国語(近代以降の文章)」から1科目選択 ※旧教育課程履修者の内希望する者[旧 数学I]、「旧 数学I-A]、 [旧数学II-B]から1科目の選択可
リハビリテーション科学部 (理学療法学科/作業療法学科/言語聴覚療法学科)	理科・地理 歴史・公民	「化学基礎」、「生物基礎」、「物理基礎」から2科目選択、または 「化学」、「生物」、「物理」、「世界史A」、「世界史B」、「日本史A]、 [日本史B]、「地理A」、「地理B」、「現代社会」、「倫理」、「政治・ 経済」、「倫理・政治・経済」から1科目選択 ※旧教育課程履修者の内希望する者[化学I]、「生物I」、「物理I」から1科目選択可

【備考】 ●「英語」については、筆記試験のみを対象とし、リスニングテストは含まれません。
●薬学部の「数学」「理科」については、センター試験の得点を2倍にして計算します。
●各教科・科目で2科目以上受験した場合は、最も高得点の科目を合否判定に使用します。

センター利用入試(前期B・後期)の指定教科・科目

学部・学科	教科	科目
薬学部 (薬学科)	外国語	「英語」、「数学I-A]、「数学II-B」から1科目選択 ※旧教育課程履修者の内希望する者[旧 数学I-A]、 [旧数学II-B]から1科目の選択可
	理科	「化学基礎」、「生物基礎」、「物理基礎」から2科目選択または「化 学」、「生物」、「物理」から1科目選択 ※旧教育課程履修者の内希望する者[化学I]、「生物I」、「物理I」 から1科目選択可
看護福祉学部 (看護学科/臨床福祉学科)	外国語・ 数学・国語	「英語」、「数学I]、「数学I-A]、「数学II]、「数学II-B]、「国語(近代以降の文章)」から1科目選択 ※旧教育課程履修者の内希望する者[旧 数学I]、「旧 数学I-A]、 [旧数学II-B]から1科目の選択可
心理科学部 (臨床心理学科)	理科・地理 歴史・公民	「化学基礎」、「生物基礎」、「物理基礎」から2科目選択、または 「化学」、「生物」、「物理」、「世界史A]、「世界史B]、「日本史A]、 [日本史B]、「地理A]、「地理B]、「現代社会]、「倫理]、「政治・ 経済]、「倫理・政治・経済」から1科目選択 ※旧教育課程履修者の内希望する者[化学I]、「生物I」、「物理I」から1科目選択可

【備考】 ●「英語」については、筆記試験のみを対象とし、リスニングテストは含まれません。
●「英語」以外の科目は、センター試験の得点を2倍にして計算します。
●各教科・科目で2科目以上受験した場合は、最も高得点の科目を合否判定に使用します。

歯科衛生士 試験概要

AO方式入試エントリー受付中。各入試の試験会場は道内各地。

本年度も歯科衛生士専門学校では、AO方式入試においてエントリーを受け付けます。推薦入試を10月・11月と2回実施し、推薦入試II期は本校・帯広・北見・函館の4会場、一般前期Aは札幌・帯広・北見・函館の4会場、一般前期Bは札幌・旭川・帯広・北見・函館の5会場で開催します。また、AO方式入試・推薦入試において早期に受験し合格した方は、入学金20万円の半額が減免となります(人数に制限があります)。

■2015年度 北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校入学試験概要

	AO方式入試	推薦入試		一般前期入試(A日程)	一般前期入試(B日程)	一般後期入試
		I 期	II 期			
募集定員	20名	17名		5名	5名	3名
試験日	エントリーシート提出後、面接を実施	2014年10月11日(土)	2014年11月9日(日)	2014年12月7日(日)	2015年1月31日(土)	2015年2月28日(土)
合格発表日	出願受付後10日以内に通知	2014年10月17日(金)	2014年11月14日(金)	2014年12月10日(水)	2015年2月5日(木)	2015年3月6日(金)
試験会場	本校(当別キャンパス)他	本校(当別キャンパス)	本校(当別キャンパス)・帯広・北見・函館	札幌(札幌サテライトキャンパス)・帯広・北見・函館	札幌・旭川・帯広・北見・函館	札幌(札幌サテライトキャンパス)

編入学 試験概要

2年次・3年次の編入学制度があります。

本学は、一般の入学試験とは別に、専修学校や短期大学を卒業した方(卒業見込み者含む)、または大学在学中(2年以上、62単位以上修得)の方、さらに一度社会に出たけれども専門知識や能力をより高めたいと考えている方を対象に、2年次、3年次編入学試験を実施しています。一般選抜のほか、社会人特別選抜も実施しています。また、編入学試験は毎年2回行われており、I期で不合格であってもII期で再チャレンジすることができます。

■2015年度 北海道医療大学編入学試験概要

※心理学部言語聴覚療法学科の編入学試験は、学科の改組転換に伴い、2015年(平成27)年度より編入学学生の募集を停止します。尚、2017(平成29)年度よりリハビリテーション科学部言語聴覚療法学科の編入学試験を実施予定です。

	薬学部 (3年次編入)	歯学部 (2年次編入)	歯学部 (3年次編入)	看護福祉学部 (3年次編入)		心理学部 (3年次編入)	リハビリテーション科学部 (2年次編入)	
	●薬学科	●歯学科	●歯学科	●看護学科	●臨床福祉学科	●臨床心理学科	●理学療法学科	●作業療法学科
I 募集定員	7名	若干名	若干名	6名	6名	2名	3名	3名
I 試験日	2014年11月9日(日)							
I 合格発表日	2014年11月14日(金)							
I 試験会場	本学(当別キャンパス)・東京・大阪							
II 募集定員	3名	若干名	若干名	3名	3名	若干名	2名	2名
II 試験日	2015年1月31日(土)			2015年1月30日(金)				
II 合格発表日	2015年2月11日(水)	2015年2月5日(木)			2015年2月11日(水)			
II 試験会場	札幌・東京・大阪							

大学院入学 試験概要

各研究科とも、一般選抜、社会人選抜を実施。

本学の大学院には、薬学・歯学・看護福祉学・心理学・リハビリテーション科学の5研究科があり、すべての研究科において一般選抜と社会人選抜があります。また、歯学研究科では「研究コース」に加え「認定医・専門医養成コース」もあり、研究者だけでなく、認定医・専門医育成の体制も整っています。看護学専攻修士課程では、専門看護師(CNS)、ナースプラクティショナー(NP)の教育課程も設置しています。

■2015年度 北海道医療大学大学院入学試験概要

※2014年10月以降の日程を掲載

	薬学研究科	歯学研究科	看護福祉学研究科	心理科学研究科	リハビリテーション科学研究科	
	●生命薬科学専攻[修士課程] ●薬学専攻[博士課程]	●歯学専攻 ※1[研究コース/認定医・専門医養成コース]	●看護学専攻 ●臨床福祉学専攻	●臨床心理学専攻 ●言語聴覚学専攻	●リハビリテーション科学専攻	
修士課程 第1回	募集定員	—	—	—	一般選抜：5名(社会人を含む) 社会人選抜：5名(一般を含む)	
	試験日	—	—	—	2014年10月17日(金)	
	合格発表日	—	—	—	2014年10月24日(金)	
修士課程 第2回	募集定員	一般選抜：3名(社会人を含む) 社会人選抜：3名(一般を含む)	—	一般選抜：(看護学)若干名(社会人を含む) (臨床福祉学)若干名(社会人を含む) 社会人選抜：(看護学)若干名(一般を含む) (臨床福祉学)若干名(一般を含む)	一般選抜：(臨床心理学)若干名 (言語聴覚学)2名(社会人を含む) 社会人選抜：(臨床心理学)若干名 (言語聴覚学)2名(一般を含む)	一般選抜：若干名(社会人を含む) 社会人選抜：若干名(一般を含む)
	試験日	2015年1月15日(木)	—	2015年1月20日(火)	2015年1月21日(水)	2015年1月26日(月)
	合格発表日	2015年1月22日(木)	—	2015年1月27日(火)	2015年1月29日(木)	2015年2月2日(月)
博士課程 第1回	募集定員	—	—	一般選抜：(看護学)2名(社会人を含む)※ (臨床福祉学)2名(社会人を含む)※ ※社会人は、修士課程修了後3年以上の実務経験を有する者	一般選抜：(臨床心理学)2名 (言語聴覚学)2名(社会人を含む) 社会人選抜：(言語聴覚学)2名(一般を含む)	—
	試験日	—	—	2015年2月10日(火)	2015年2月12日(木)	—
	合格発表日	—	—	2015年2月17日(火)	2015年2月19日(木)	—
博士課程 第2回	募集定員	一般選抜：3名(社会人を含む) 社会人選抜：3名(一般を含む)	一般選抜：4名(社会人を含む) 社会人選抜：4名(一般を含む)	—	—	—
	試験日	2015年1月15日(木)	2015年2月16日(月)	—	—	—
	合格発表日	2015年1月22日(木)	2015年2月23日(月)	—	—	—
博士課程 第3回	募集定員	—	一般選抜：若干名(社会人を含む) 社会人選抜：若干名(一般を含む)	—	—	—
	試験日	—	2015年3月9日(月)	—	—	—
	合格発表日	—	2015年3月16日(月)	—	—	—

[試験会場] 薬学研究科・歯学研究科・看護福祉学研究科・リハビリテーション科学研究科は当別キャンパス、心理科学研究科は札幌あいの里キャンパスで実施します。

※1 研究コースは一般選抜および社会人選抜、認定医・専門医養成コースは一般選抜のみの実施になります。

私の学生時代

歯学部
口腔構造・機能発育学系
組織学分野

教授 入江 一元



私が大学に入学したのは昭和55年、歯学部では最後発の長崎大と岡山大の1回生、北海道医療大学では歯学部の3回生と同期になる。

2年間の教養課程は新潟の市街から約10キロ離れたキャンパス。大学近くの私のアパートは三畳に押し入れを改造した造付けのベッド、共同の台所、風呂、便所(水洗ではない)、周りはスイカと大根の畑だった。2年間だけだったが、寮のような生活だったので、学部の違いや先輩や同級生との付き合いは濃密で、今も交流がある。



スポーツ大会。学年対抗の運動会、スポーツ大会では一丸となって盛り上がった。後列中央(紺のウィンドブレーカー)が私。

歯学部のサッカー部に入り、教養の間は授業の後、市街の歯学部グラウンドに同級生とともに通った。学部に移ると朝8時半から5時まで授業があった。組織学などは4時半まで講義をして、今日は早めに終わってくれるのかと思っていると、実習があることを告げられ、実習室に移動すると標本が7,8枚あって愕然としたこともあった。それでも部活動の時間には実習を切り上げてボールを蹴っていた気がする。各科の実習期間の終わりに班の仲間とともにインストラクターの先生を囲み打上げは楽しみだった。

解剖学実習で大動脈弓からの分枝の破格例に遭遇した。5年生の初めにその症例を学内の会で報告することになり、解剖学講座に通うようになった。歯学部では秋に歯学祭という文化祭を行っていた。毎年5年生が中心となって各研究室に通い、それぞれの研究室に関連した展示や発表を一般の人にも公開するのだ。私は前述の流れで、夏休みも解剖学講座に通い、



細菌学実習打上げ。研究室で行ったもので、後列右端が私、前列右端は本学微生物学分野の中澤先生。

電子顕微鏡を使わせてもらってネズミの骨や自分の血球の写真などを撮った。魅力的だったのは解剖学講座の先生方だけでなく、医学部や歯学部の臨床から研究に来ていた多くの先生や、お中元や何やら研究室に山積みになっていたビールだ。私はせっせと通り、夕方になると先生方とビールを飲み、冷蔵庫が寂しくなると補充した。

時代は少々変わったが、今も講義室や実習室だけが大学ではないと思う。クラブ活動に精を出すのも良い、研究室に首を突っ込んでみるのも良い、そこには講義室や実習室とはまた別の「大学」がある。

私の学生時代

今、本学の教壇に立てられている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は入江一元教授と金澤潤一郎講師のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

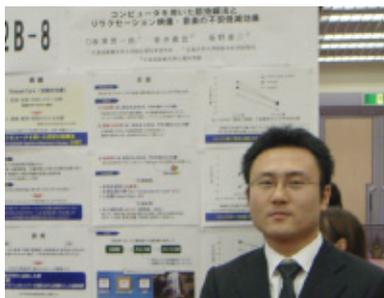
私の学生時代

心理科学部
臨床心理学科

講師 金澤 潤一郎



私は久留米大学法学部法律学科を卒業後、約1年半のアルバイト生活(不安にかられながら英語の勉強もしていました)を経て、2年間、アメリカのバーモント州にある小さな大学に学部留学をしました。それが14年前(2000年前後)。それが心理学との出会いです。その



修士1年時、初めての学会発表。

後、本学臨床心理学科に編入(心理科学部1期生)、そして大学院(修士、博士)を経て現在に至ります。回り道ですが、ある意味で最短ルートだったと思っています。

アメリカの大学は単位取得が難しいため、アメリカ人のルームメイトが就寝後、寮の廊下にバスケットボールを置き、それを椅子に深夜まで勉強していました。留学中には9.11の同時多発テロが起きたこともあり、多国籍の学生達と酒を片手に、政治、歴史観、文化、宗教などについて、楽しく、時にはシリアスに議論しました。自分とは全く違う価値観があり、その相違には背景があることを強く体験しました。

本学編入後は、「まだお会いしていない将来の相談者を想定しながら」授業を聞き、学んだ知識の応用法をいつも考えていました。週末はボランティアサークル「オリオン」を運営して、学生達とボランティア活動をしていました。活動後には皆で遊び、「ボランティアって楽しい」ことを感じてもらおうと試みていました。ちな



留学時代の友人と左から二人目が私。

みに、友人や後輩と参加した球技大会(バスケットボール)で優勝したこともあります。

本学大学院では、信頼できる同期達と助け合いながら、先生方、学内外の先輩方、後輩、何よりも相談者の皆様から多くのことを学びました。今でも同期や先輩・後輩と学会や研修会等で近況を伝えあうのは大きな楽しみです。

海外経験のない家庭に育ち、留学する知人もいませんでした。「アメリカで心理学の勉強を始めたい」と言っていたアルバイト時代には、大学教員になるとは誰も思っていなかったはずですが。縁と運に恵まれてきたことに改めて感謝しています。

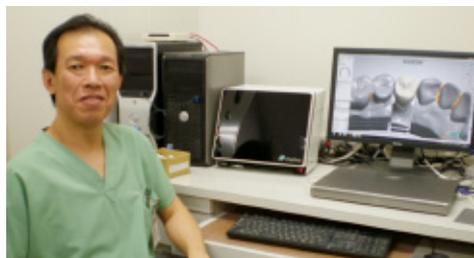
全国に先駆けて大学病院で導入した 歯科技術が全国紙に紹介されました

平成26年5月22日(木)の読売新聞夕刊に、歯学部(高度先進補綴学) 足田准教授らが開発を進め、4月から新たに保険適用となったCAD/CAM冠に関する記事が掲載されました。

従来は手作業で歯科技工士らが制作していた歯の「かぶせ物」。

それをコンピューターで設計し、自動の加工用機械で削り出す手法をCAD/CAM冠といいます。

CAD/CAM冠は耐久性や見た目に優れ、アレルギーを起こす心配もないことから、現在は、施設基準に適合する全国の保険医療機関において導入が進められています。



コンピューター支援設計・製造ユニットと足田准教授



読売新聞夕刊(平成26年5月22日)掲載記事

北海道医療大学から生まれたCAD/CAM冠

歯学部口腔機能修復・再建学系高度先進補綴学分野 准教授 足田 一洋

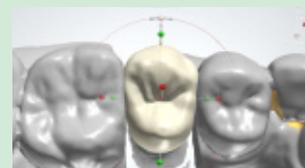
平成26年4月から、本学大学病院で開発を進めていたCAD/CAM冠が新たに保険適用になりました。CAD/CAM冠とは、従来は歯科技工士らが手作業で製作してきた歯の「かぶせ物」をコンピューターで設計し加工用機械で自動的に削り出す手法のことで、平成21年4月、本学大学病院が全国に先駆けて先進医療として承認された治療技術です。

CAD/CAM冠は従来の素材よりも高強度のハイブリッドレジンプロックという材料から作られており、口の中での耐久性や見た目に優れ、アレルギーを起こす心配もないことから、現在は全国の保険医療

機関において治療が行われています。

本学大学病院では、平成11年に最新の歯科用CAD/CAMシステムを導入し、コンポジットレジン、セラミック、チタン、アルミナなどいろいろな材料で臨床応用を試み、臨床研究を行ってきました。そして一連の臨床研究の中で先進医療への申請を検討し、メーカーと共同で材料としてハイブリッドレジンプロックという新規材料を開発しました。

今後、北海道医療大学から生まれたCAD/CAM冠が保険医療における新しい治療法として幅広く利用され、日本国民の健康増進につながることを期待しています。



CAD画面



ハイブリッドレジンプロック

大学院歯学研究科の眞島いづみさんとArafat Kabirさんが 台北医学大学で表彰されました

平成26年5月19日(月)から25日(日)の期間、本学と交流協定を結んでいる台北医学大学にて、第4回口腔医学に関する国際シンポジウムが開催されました。今回のシンポジウムでは、「トランスレーショナル・メディスン-基礎研究から臨床応用へ」と題したテーマの下、台北医学大学が協定を締結している海外の大学(日本、タイ、オーストラリア、アメリカ、カナダ、フランス、デンマーク)から18名の研究者が招待され、台湾の研究者とともに口腔医学の様々な領域における先端的な研究成果や今後の課題について活発に討論されました。本学歯学部からは、斎藤隆史歯学部長(歯学部う蝕制御治療学分野)と遠藤一彦教授(歯学部生体材料工学分野)が招待され、それぞれ50分の講演を行いました。シンポジウムは、土曜日と日曜日に開催されましたが、週末にもかかわらず多くの学生・大学院生が教員とともに出席し、熱心に耳を傾けている姿が印象的でした。

シンポジウムに併催して、学部学生と大学院生とを対象とした研究発表のコンペティションが行われま

した。本学からは、大学院歯学研究科4年生の眞島いづみさんと同じく大学院4年生でバングラデシュ人民共和国からの留学生であるArafat Kabirさんが口頭発表の基礎研究部門に参加しました。眞島さんの研究発表(演題名: The Crucial Roles of Autoinducer-2 from *V. tobetsuensis* in Oral Biofilm)とKabirさんの研究発表(演題名: Demineralized dentin graft in tri-cortical iliac bone defect of adult sheep)は、4名の審査委員から研究の内容と討論を含めた発表の技量が特に優れていると評価され、懇親会の席上で口腔医学院院長の歐 取良先生から両名に対して表彰状が授与されました。

今年度における本学と台北医学大学との短期交流事業では、8月に台北医学大学の薬学部と歯学部学生を受け入れ、翌年3月には本学薬学部、歯学部および看護福祉学部学生の派遣を予定しており、両大学間で学生と教員の国際交流が益々盛んになることが期待されます。



欧院長から表彰状を授与された眞島いづみさん(大学院歯学研究科4年生)



同じくArafat Kabirさん(大学院歯学研究科4年生、留学生)

大学祭「第36回九十九祭」が 開催されました

テーマ 「夢中になれ ～ MAKE A SMILE」

創立40周年を迎える記念すべき年に、今年度も36回目を迎える北海道医療大学大学祭「九十九祭」が6月13日から3日間にわたり開催されました。

期間中は盛大な花火大会のほか様々なイベントや出店があり、地域住民の方々や他大学の学生、オープンキャンパスが同時開催だったこともあり高校生も多数来場し、大変なにぎわいをみせていました。



主な内容

- 6/13(金)〈前夜祭〉
 - ・体育館でのステージ発表
 - ・花火大会(グラウンド)

- 6/14(土)・15日(日)〈本祭〉
 - ・学術発表(学内各所)
 - ・アトラクションステージ、出店

- ステージ出演
 - ・学内各団体・サークル等発表
 - ・YOSAKOIソーラン演舞
 - ・[空想委員会]ライブ (14日)
 - ・[HAMBURGER BOYS]ライブ (15日)
 - ・[パレードパレード]ライブ (15日)



本学YOSAKOIソーラン祭り部が 2014ファイナル進出・優秀賞を 受賞しました!

6月4日(水)から8日(日)まで開催された「第23回YOSAKOIソーラン祭り」において、本学YOSAKOIソーラン祭り部(チーム名『THE☆北海道医療大学』)は見事ファイナル進出を果たし、優秀賞を受賞しました。

出場20周年という節目の年に、「軌跡」をテーマにした壮大で躍動感のある演舞を披露し、その素晴らしい演舞に札幌市内の各演舞会場では、観客から大きな拍手と声援が送られました。

応援、ご協力いただきました大学近隣住民の皆様、OB・OGの皆様、本当に有難うございました。



クラブ

今年もたくさんのクラブが各大会で大健闘!

学友会体育局所属の各団体より4～8月の試合結果が報告され、以下の優秀な成績を残しました。

■2014年度クラブ戦績

団体名	月 日	大会名	参加種目	戦 績
バドミントン部	4/23～4/27	2014年度 第56回北海道学生バドミントン 春季リーグ戦大会	男子(2部リーグ)	優勝(1部昇格)
			女子(2部リーグ)	優勝(1部昇格)
インディアカ 同 好 会	7/6	第7回 青森県民スポーツ・レクリエーション祭	一般混合の部 (1部リーグ)	3位
柔 道 部	8/1～8/3	第46回 全日本歯科学学生総合体育大会	個人男子 66kg級	3位 1年 久保田 優理
ゴ ル フ 部	8/4～8/6	第46回 全日本歯科学学生総合体育大会	個人男子	準優勝 3年 山本 直弥



インディアカ同好会



柔道部



ゴルフ部

本学バドミントン部・男女ともに一部リーグ昇格!

4月23日より開催された第56回北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会において、本学バドミントン部は強豪校との接戦を勝ち進み、男女ともに優勝を果たしました。

これに伴う一部リーグとの入れ替え戦においても圧倒的な勝利を収め、見事、男女ともに一部昇格を果たすという快挙を成し遂げました。

本学ではバドミントン部をはじめ、体育局・文化局の各団体・サークルにおいても、日々の勉学と共に、サークル諸活動に積極的かつ精力的に励んでいます。



第56回北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会にて

5/13 中国・同済大学と交流協定を更新しました

平成26年5月13日(火)、中国・同済大学口腔医学院より王佐林院長と張磊副教授が来学し、本学歯学部との交流協定更新の調印を行いました。



本学到着後は齋藤歯学部長と共に新川学長、黒澤副学長を表敬訪問し、来学の挨拶とこれまでの両大学の交流事業について報告をしました。その後、齋藤歯学部長、越野教務部長、大野学事相談役と今後の両学部間の交流について意見交換が行われ、教育、研究の両面からより一層、交流活動を進展させていくことを確認しました。

調印式では、本学関係者の見守る中、齋藤歯学部長、王院長により協定書への署名が行われ、協定更新が完了しました。

本学歯学部と同済大学口腔医学院は平成5年より協定を結んでおり、本学の海外提携大学としては長い交流の歴史を持つ大学の一つです。



これまでも数々の交流実績があり、平成26年3月には本学歯学部の学生が同済大学での短期臨床実習に参加しています。今回の協定更新が今後のさらなる交流発展に繋がることが期待されます。

5/22 インド大使館科学技術部による本学視察が行われました

平成26年5月22日(木)、インド大使館科学技術部よりチャダラム・シヴァジ参事官が来学し、本学研究施設の視察を行いました。

本学到着後、学長室を訪問し、学長に来学の挨拶および視察受け入れのお礼を述べられました。

シヴァジ氏はインド国内の科学技術振興のためにインド政府の科学技術部に所属し日本各地の研究施設の視察を行っており、自身も地球物理学者として研究を続けています。

今回の来道では、本学のほか森町の地熱発電所、豊羽鉱山、北海道大学農学研究科などの訪問が予定されていました。

本学では、主に薬学部、歯学部の研究機器、

動物実験センター、アイソトープ研究センター、個体差健康科学研究所やその他関連施設の視察を行い、各学部の先生による説明に興味深く聞き入り、質問を繰り返していました。

その後は、札幌あいのりキャンパスを経由して市内に向かい、札幌サテライトキャンパスを見学し、予定していた視察を終えました。

今回の訪問は、昨今高まるインドと日本の交流発展の一環として、

両国の科学技術交流にむけた取り組みの一面もあつたようです。北海道訪問、そして本学での視察が、今後の日本とインドの科学技術交流発展の一助になることを期待したいと思います。



学長室にて新川学長とシヴァジ氏



薬学部岡崎教授によるハイテクサーチャラボの紹介

EDITOR'S NOTE

コンピュータの発達により、「情報」の管理が大変に難しい社会になっています。欲しい「情報」の検索は、極めて簡単になりました。たとえばパソコンの調子が悪く、原因と解決策がわからないとき、web上で検索欄に症状や状況などを示すキーワードを入力すると、沢山の方々が、同じ経験をした時の解決策を書き込んだブログなどがヒットします。そしてその方法を試してみると、最終的に解決できることを経験します。結果からは、その「情報」は有益な「正しい」情報であると言えます。ところが同じ「情報」の中にも、「間違った」ものや「悪意による偽りの」情報が紛れ込んでいることも多くあります。

そこでまず、「情報検索」の後には、「情報の質」の判断とその「情報」を利用するかどうかの判断が今まで以上に大切になってきたと考えます。さらに言えば「情報管理」も不可欠なスキル(たとえば電子化された診療情報の厳密な管理と個人情報保護など)です。今後は、大学だけでなく、すべての教育課程において、情報処理教育が最重要科目になってくると思っています。この広報誌の「情報」においても、正しく有益で、よく「管理」されたものであることを願っています。

(E.N記)

ADVANCE

北海道医療大学広報誌 No.159

STAFF ● 遠藤 泰 浜上 尚也 中山 英二 鎌口 有秀
遠藤 紀美恵 志渡 晃一 藤原 宏次 田村 至
大塚 裕之 木村 恵 杉原 佳奈 杉谷 昌彦
宮川 雄一 國見 明美 塚田 将人

発行日 ● 2014年10月

編集・発行 ● 北海道医療大学広報・教育事業部 入試広報課
〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757
☎(0133)22-2113
http://www.hoku-iryu-u.ac.jp

広報誌についてのご意見・ご要望・情報等をお待ちしております。
E-mail:nyushi@hoku-iryu-u.ac.jp



■北海道医療大学の教育理念
生命の尊重と個人の尊厳を基本として、保健と医療と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、確かな知識・技術と幅広く深い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人を育成することによって地域社会ならびに国際社会に貢献することを本学の教育理念とする。